高等学校における教科指導の充実

外国語科 (英語)

「授業を英語で行う」ということ

栃木県総合教育センター 平成25年3月

まえがき

21世紀は、新しい知識・情報・技術が、政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われています。そのような時代を生きるためには、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことがますます重要になっています。また、幅広い、活用できる生きた知識・柔軟な思考力・判断力・表現力等、変化に対応する力が必要になります。他方、各種の国際的な調査からは、我が国の児童生徒について、思考力・判断力・表現力等、知識・技能の活用、学習意欲、学習習慣・生活習慣などに課題があると分析されました。このような状況を踏まえて、平成20年1月の中央教育審議会の答申を受け、平成21年3月に高等学校学習指導要領が告示されました。

この新しい学習指導要領は、高等学校では平成25年度入学生から、年次進行で実施されます。総則の一部、総合的な学習の時間及び特別活動においては、平成22年度から先行して実施されています。また、数学、理科及び理数の各教科・科目については、平成24年度入学生から年次進行により先行して実施されています。各学校においては、新しい学習指導要領の理念をどのように実現してしていくのか、具体的な検討をすすめることが喫緊の課題です。

栃木県総合教育センターでは、基礎・基本の確実な定着を図る教科指導の在り方について研究するとともに、その成果を普及することで生徒の学力の向上に資することを目的に、平成17年度から「高等学校における教科指導の充実に関する調査研究」を行ってきました。今年度は、学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえるとともに、各種調査の結果から指摘されている課題の解決を図るための授業改善について、数学科、外国語科(英語)、家庭科、農業科、工業科の各教科で調査研究に取り組みました。本冊子はその成果をまとめたものであり、教科指導を充実させる一助として、御活用いただければ幸いです。

最後に、調査研究を進めるに当たり、御協力いただきました研究協力委員の方々に深 く感謝申し上げます。

平成25年3月

栃木県総合教育センター所長 金 井 正

目 次

本調査研究の背景	1
(1) 学習指導要領改訂の基本的な考え方	
(2) 教育内容の主な改善事項	
(3) 学習評価の基本的な考え方	
調査研究を始めるに当たり	5
(1)調査研究の課題設定の理由	
(2)研究の内容	
研究事例 1 英語 I における「導入」「内容理解」「表現活動・定着活動」	
に関する様々な指導事例	6
研究事例 2 英語 Ⅱにおける「導入」「内容理解」「表現活動・定着活動」	
に関する様々な指導事例	20
研究事例3 1レッスンを通しての「導入」「内容理解」「表現活動・定着活	動」
に関する様々な指導事例	32
1-121 / の14 / 101日立 11 / 1	02
おわりに	46
051/7/1C	40

※本資料は、栃木県総合教育センターのホームページ「とちぎ学びの杜」内、「調査研究」と「教材研究のひろば」のコーナーにも掲載しています。

「とちぎ学びの杜」 http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/

本調査研究の背景

今年度の「高等学校における教科指導の充実に関する調査研究」は、平成21年告示の高等学校 学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえるとともに、各教科に求められている課題の解決を図るため の教科指導の在り方を探ることに重点を置き、数学科、外国語科(英語)、家庭科、農業科、工業 科で実施するものである。

各教科で調査研究した内容を次章以降に提示するに当たり、まず、平成21年告示の高等学校学習指導要領改訂の基本的な考え方、教育内容の主な改善事項及び学習評価の基本的な考え方について整理する。

(1) 学習指導要領改訂の基本的な考え方

平成21年告示の高等学校学習指導要領の改訂では、21世紀を生きる子どもたちの教育の充実を図るため、「生きる力」をはぐくむという教育課程の基準全体の見直しを図った。今回の改善の方向性は、平成20年1月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」に示されている。答申では、以下の①~⑦を基本的な考え方として、各学校段階や各教科等にわたる学習指導要領の改善の方向性が示された。

- ① 改正教育基本法等を踏まえた学習指導要領改訂
- ② 「生きる力」という理念の共有
- ③ 基礎的・基本的な知識・技能の習得
- ④ 思考力・判断力・表現力等の育成
- ⑤ 確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保
- ⑥ 学習意欲の向上や学習習慣の確立
- (7) 豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実

具体的には、①については、教育基本法が約60年振りに改正され、21世紀を切り招く心豊かでたくましい日本人の育成を目指すという観点から、これからの教育の新しい理念が定められたことや、学校教育法において教育基本法改正を受けて、新たに義務教育の目標が規定されるとともに、各学校段階の目的・目標規定が改正されたことを十分に踏まえた学習指導要領改訂であることを求めた。③については、読み・書き・計算などの基礎的・基本的な知識・技能は、例えば、小学校低・中学年では体験的な理解や繰り返し学習を重視するなど、発達の段階に応じて徹底して習得させ、学習の基盤を構築していくことが大切との提言がなされた。この基盤の上に、④の思考力・判断力・表現力等をはぐくむために、観察・実験、レポートの作成、論述など、知識・技能の活用を図る学習活動を発達の段階に応じて充実させるとともに、これらの学習活動の基盤となる言語に関する能力の育成のために、小学校低・中学年の国語科において音読・暗唱、漢字の読み書きなど基本的な力を定着させた上で、各教科等において、記録、要約、説明、論述といった学習活動に取り組む必要があると指摘した。また、⑦の豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実については、徳育や体育の充実のほか、国語をはじめとする言語に関する能力の重視や体験活動の充実により、他者、社会、自然・環境とかかわる中で、これらとともに生きる自分への自信をもたせる必要があるとの提言がなされた。

また、高等学校の教育課程の枠組みについては、高校生の興味・関心や進路等の多様性を踏まえ、必要最低限の知識・技能と教養を確保するという「共通性」と、学校の裁量や生徒の選択の幅の拡大という「多様性」とのバランスに配慮して改善を図る必要があることが示された。

(2) 教育内容の主な改善事項

平成21年告示の高等学校学習指導要領における教育内容の主な改善事項は次のとおりである。

- 言語活動の充実
 - ・国語をはじめ各教科等で批評、論述、討論などの学習を充実した。
- 理数教育の充実
 - ・遺伝分野などで、近年の新しい科学的知見等を踏まえ内容を充実し、統計に関する内容を 数学 I に導入した。
 - ・科目「科学と人間生活」の新設など指導内容と日常生活や社会との関連を重視した改善を 図った。
 - ・数学 I 及び数学 A に〔課題学習〕を導入したり、科目「数学活用」や「理科課題研究」を 新設したりするなど、知識・技能を活用する学習や探究する学習を重視した。
- 伝統や文化に関する教育の充実
 - ・歴史教育(世界史における日本史の扱い、文化の学習を充実)、宗教に関する学習を充実 した。
 - ・古典(国語)、武道(保健体育)、伝統音楽(芸術「音楽」)、美術文化(芸術「美術」)、 衣食住の歴史や文化(家庭)に関する学習を充実した。
- 道徳教育の充実
 - ・学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育について、その全体計画を作成することを新た に規定した。
 - ・公民「現代社会」や特別活動において人間としての在り方生き方に関する学習を充実した。
- 体験活動の充実
 - ・ボランティア活動などの社会奉仕、就業体験を充実するとともに、職業教育において、産 業現場等における長期間の実習を取り入れることを明記した。
- 外国語教育の充実
 - ・指導する標準的な単語数を1300語から1800語に増加するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場とするという観点から、授業は英語で指導することを基本とするなどの改善を図った。
- 職業に関する教科・科目の改善
 - ・職業人としての規範意識や倫理観、技術の進展や環境等への配慮、地域産業を担う人材の 育成等、各種産業で求められる知識・技術等を身に付けさせる観点から科目構成や内容を 改善した。

(3) 学習評価の基本的な考え方

現在、高等学校においては、学習状況を分析的にとらえる観点別学習状況の評価と総括的にとらえる評定とを、学習指導要領に定める目標に準拠した評価として実施している。小・中学校において観点別学習状況の評価が定着していることから、高等学校段階においても、学習評価の前提となる指導と評価の計画や、観点に対応した生徒一人一人の学習状況を生徒や保護者に適切に伝えていくなど、学習評価の一層の改善が求められている。

このようなことから、高等学校においても、学校教育法や平成21年告示の高等学校学習指導要領を踏まえ、基礎的・基本的な知識・技能に加え、思考力・判断力・表現力等、主体的に学習に取り組む態度に関する観点についても評価を行うなど、観点別学習状況の評価の実施を推進し、きめの細かい学習指導と生徒一人一人の学習の確実な定着を図っていく必要がある。なお、高等

学校における教科・科目の評価の観点は、小・中学校との連続性に配慮しつつ、平成21年告示の 高等学校学習指導要領の趣旨を踏まえ、生徒の実態に合わせて設定することが適当である。

また、学習評価は、生徒の学習状況を検証し、結果の面から教育水準の維持向上を保障する機能を有するものである。したがって、学校が地域や生徒の実態を踏まえて設定した観点別学習状況の評価規準や評価方法等を明示するとともに、それらに基づき学校において適切な評価を行うことなどにより、高等学校教育の質の保証を図るものである。

平成21年告示の高等学校学習指導要領における評価の観点は、以下の囲みのように整理される。「知識・理解」及び「技能」については、教科の特性に応じ、知識と技能に関する観点が分けて示されていることもある。また、「思考・判断・表現」については、各教科の目標や内容を踏まえ、当該教科において育成すべき能力にふさわしい名称とし、位置付けられている。

●「関心・意欲・態度」

各教科が対象としている学習内容に関心をもち、自ら課題に取り組もうとする意欲や態度を児童生徒が身に付けているかどうかを評価するもの。評価に当たっては、各教科が対象としている学習内容に対する児童生徒の取組状況を通じて評価することが基本であり、例えば、授業中の挙手や発言の回数といった表面的な状況のみに着目することにならないよう留意する必要がある。

●「思考・判断・表現」

各教科の知識・技能を活用して課題を解決すること等のために必要な思考力・判断力・表現力等を児童生徒が身に付けているかどうかを評価するもの。従来の「思考・判断」に「表現」が加えられた。これは、この観点に係る学習評価を言語活動を中心とした表現に係る活動や児童生徒の作品等と一体的に行うことを明確に示したためである。

このため、この観点を評価するに当たっては、単に文章、表や図に整理して記録するという表面的な現象を評価するものではなく、例えば、自ら取り組む課題を多面的に考察しているか、観察・実験の分析や解釈を通じ規則性を見いだしているかなど、基礎的・基本的な知識・技能を活用しつつ、各教科の内容等に即して思考・判断したことを、記録、要約、説明、論述、討論といった言語活動等を通じて評価するものであることに留意する必要がある。

●「技能」

各教科において習得すべき技能を児童生徒が身に付けているかどうかを評価するもの。基本的には、従来の「技能・表現」で評価している内容は引き続き「技能」で評価する。

今回、各教科の内容に即して思考・判断したことを、その内容を表現する活動と一体的に評価する観点として「思考・判断・表現」が設定されたことから、当該観点における「表現」との混同を避けるため、評価の観点の名称が「技能・表現」から「技能」に改められた。

●「知識·理解」

各教科において習得すべき知識や重要な概念等を児童生徒が理解しているかどうかを評価するもの。従来の「知識・理解」の趣旨を踏まえた評価を引き続き行う。

また、評価の在り方については、「高等学校学習指導要領解説 総則編」で、次のように述べられている。

〈第3章 5 (12) 指導の評価と改善(第1章第5款の5の(12)) 〉

基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図るとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育成し、学習意欲を高めるための指導を行うためには、評価の在り方が大切である。いわゆる評価のための評価に終わることなく、生徒一人一人の学習の成立を促すための評価という視点を一層重視することによって、教師が自らの指導を振り返り、指導の改善に生かしていくことが特に大切である。

評価に当たっては、生徒の実態に応じた多様な学習を促すことを通して、主体的な学習の 仕方が身に付くように配慮するとともに、生徒の学習意欲を喚起するようにすることが大切 である。その際には、学習の成果だけでなく、学習の過程を一層重視する必要がある。特に、他者との比較ではなく生徒一人一人の持つよい点や可能性などの多様な側面、進歩の様子などを把握し、学年や学期にわたって生徒がどれだけ成長したかという視点を大切にすることが重要である。また、生徒が自らの学習過程を振り返り、新たな自分の目標や課題をもって学習を進めていけるような評価を行うことが大切である。

学習評価においては、生徒のよい点や進捗の状況などを積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し、教師が自らの指導の改善を行い、生徒の学習意欲の向上に生かすようにすることが大切である。そのためにも、「関心・意欲・態度」、「思考・判断・表現」、「技能」、「知識・理解」の4観点の趣旨を踏まえ、適切に評価を進めていくことが求められる。

[・]本冊子においては、以降、平成11年3月に告示された学習指導要領を「現行の学習指導要領」、平成21年3月に告示された学習指導要領を「新学習指導要領」として記す。

[・]本冊子に掲載した単元等に付してある評価規準は、新学習指導要領における教科・科目を想定して、 参考として掲載したものである。

調査研究を始めるに当たり

1 調査研究の課題設定の理由

新学習指導要領では、「生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行う」(高等学校学習指導要領 平成21年 文部科学省)ことが明記された。授業を英語で行うためには、授業全体を見直し、指導法を改善し、新しく授業をデザインする必要がある。例えば、授業の大部分の時間で日本語を用いて訳読をしている場合、授業をそのままの形態で英語で行っても、生徒はなかなか理解できず、教室の中で教師だけが英語で話しているという状況が生まれてしまうのではないかと考える。新学習指導要領に示されている「生徒が英語に触れる機会を充実」させることと、「授業を実際のコミュニケーションの場面とする」ことを重要な要素と捉え、「生徒が英語に触れる機会をいかに増やすか、英語を英語のまま理解したり、英語でやりとりをしたりするコミュニケーションの場面をどのように設定するか」ということに焦点を当て研究を行うことにした。

2 研究の内容

英語で行う授業では、「導入」「内容理解」「表現活動・定着活動」の三つが主な要素と考えられる。本研究では、

- I この三つの要素それぞれにおいて、どのような指導方法があるのかを研究する。(研究事例 1、研究事例 2)
- Ⅲ この三つの要素を、一つのレッスンにどのように組み込みながら指導する方法があるのかを研究する。(研究事例3)

の二つの内容で調査研究を行うこととした。

まず、3人の研究協力委員が、現在の生徒の実態や状況を把握するために、勤務校で事前にアンケートをとった。それを、分析、検証し、この研究を通してどのような力を生徒に身に付けさせたいかを到達目標として設定した。その目標に向けて様々な授業実践を行った後、事後アンケートをとり、生徒の変容を調べることにした。

研究事例1

英語 I における「導入」「内容理解」「表現活動・定着活動」 に関する様々な指導事例

1 生徒の実態及び課題の設定~英語に関する事前アンケート結果から~

(1)事前アンケート

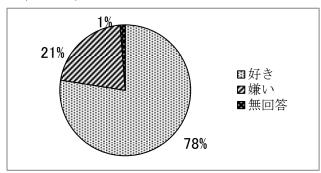
英語学習に対する意識を調査するために、平成 24 年 6 月に、以下のようなアンケートを実施した。今回のアンケートの調査対象は第 1 学年 80 名で、英語 I を 4 単位履修している。

<実施したアンケート項目>

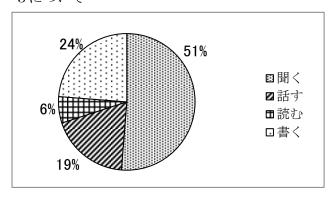
- 1 あなたは英語が好きですか?
- 2 「聞く」「話す」「読む」「書く」の中で、最も得意なことは何ですか?
- 3 「聞く」「話す」「読む」「書く」の中で、最も苦手なことは何ですか?
- 4 生徒が英語に触れる機会を充実させるとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面と するために授業を英語で行うことについて、あなたはどう思いますか?
 - ①先生がたくさん英語で質問したり、説明したり、指示をしたりすることについて。
 - ②自分が英語で質問に答えたり、ペアワークをしたり、発表をしたり、意見を書いたりすることについて。
- 5 英語の授業の中でどのようなことをしてほしいですか。(自由記述)

<アンケート結果>

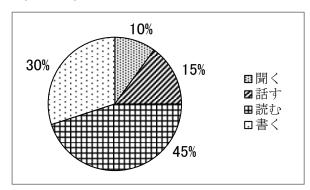
1について



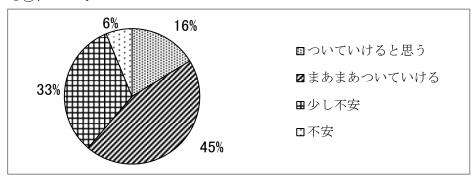
3について



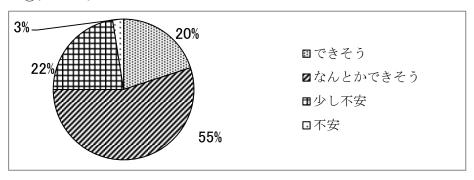
2について



4①について



4②について



5について <主なものを抜粋>

- ・大勢の前で英語を話すのは緊張するので、グループワークやペアワークを増やしてほしい。
- ・自分で考えて話す時間を増やしてほしい。
- ・ 音読練習をしたい。
- ・もっと英語で会話をして、英語を話すことに慣れたい。
- ・文法をしっかり教えてほしい。
- ・実際に使える英語の表現や日常会話をもっと教えてほしい。
- ・自由英作文を書きたい。
- リスニング対策をしてほしい。
- ・日本語で授業をしてほしい。

アンケートの結果、約8割の生徒が英語を「好き」と思っていることが分かった。また、「読む」ことを得意とする生徒が半数近くいた。これは授業中に、訳読も含めた本文の読み取りに多くの時間を割いていたり、予習として教科書の本文を訳していたりすることに原因があるのではないかと思う。苦手なことに関しては、「聞く」ことが最も多く半数以上を占めた。「聞く」ことに対して苦手意識をもつ生徒の数は、「話す」ことに対して苦手意識をもつ生徒の数の倍以上であった。活動の指示のように内容が予測できるものであれば「聞く」ことができるが、本文の内容を理解するための説明や本文の言い換えなどを英語で聞き取って理解することは難しいと感じているのではないかと考えられる。授業中に生徒自身が英語を使用することについては、75%の生徒が不安を感じていないと回答しており、自分が英語を使用することに対してよりも、教師が英語を使用することに対する不安の方が大きいことが分かった。「書く」ことに対して苦手意識をもつ生徒が24%おり、自由記述でも定型だけでなく自由作文なども取り入れて、「書く」活動を増やしてほしいという要望が多くあることが分かった。

(2) アンケートから考える課題と到達目標

「聞く」ことに苦手意識をもったままでは、授業を英語で行うことや、英語でコミュニケーションを図ることは難しいと考える。「聞く」機会を授業の中で増やすことが必要であるが、苦手意識がある生徒が多いため、内容理解を英語で進める際には、ワークシートや板書などを工夫して、生徒の理解を助ける必要がある。また、教師が一方的に内容を英語で説明するのではなく、分かりやすい発問を繰り返し、理解度を確認しながら進めていく必要もある。さらに、日本語での解説が必要な部分と英語のみでも行える部分とを教師が見極めることも重要である。特に、未知の単語や熟語は聞き取りが困難であると考えられるため、内容理解に入る前の新出語句の確認は音読までしっかり行い、十分に慣れさせるような指導の工夫も必要になる。

「書く」ことに関しては、定型作文だけではなく自由作文も実施してほしいという要望が多かったことから、生徒の「自分のことや意見を英語で表現したい」という気持ちを生かして、「書く」力を伸ばしていく活動を工夫する必要がある。

このような指導を通して、英語での内容理解に関する質問に対して、教科書の本文からの抜き 出しだけではなく自分の言葉で答えられる力や、書かれている内容などについて、自分なりの意 見をもち、それを相手に伝えたり、相手の意見を聞いて理解したりできる力を身に付けさせるこ とを到達目標とした。

2 本研究の流れ

本研究では、Lesson 2 When I was sixteen と Lesson 3 Abu Simbel-Rebirth on the Nile-に おいて、「導入」「内容理解」「表現活動・定着活動」として下表にある 10 の事例を授業の中で実践した。

使用教科書: CROWN English Series [I] (三省堂)

	導入	内容理解	表現活動・定着活動
L2	・英語による Oral	・教師による英語での内容解説	・ペアでの意見交換(事例8)
	Introduction (事例 1)	(事例3)	・Story Retelling(事例9)
		・教師による英語での内容解説と	
		生徒同士での英問英答(事例4)	
		・筆者の主張の読み取り(事例 5)	
L 3	・CDを活用した本文の導入	・日本語ワークシートを基にした	・置換法によるペアでの音読
	(事例2)	Story Retelling(事例 6)	練習(事例 10)
		・自分で描いた絵を用いての英語	
		での本文説明(事例7)	

3 実践内容

(1)「導入」に関する活動

事例 1 英語による Oral Introduction

ア 指導手順

(ア) 教師が、英語で本文に関する簡単な問いかけをする。

(イ) 一斉に、又は指名して答えさせる。

イ 留意点

- (ア) 教師の発話の中で、新出単語を簡単な語で言い換えたり、熟語を用いたりする。
- (4) 全員が英語で考える場面とするため、教師の問いの後、周りの人と相談してもよいことにする。
- (ウ) 内容を全て説明しないようにして、生徒に「続きを知りたい、読みたい」という気持ちを もたせるようにする。

<授業での実際のやりとり>(Lesson 2 Section 2 での指導例)

- T: Now Hoshino got money and he is ready to go to America. Do you know where he lived then?
- S: (Silence)
- T: He lived in the prefecture to the south of Ibaraki and to the east of Tokyo.
- S: Chiba!
- T: That's right. But he didn't leave Japan from Chiba Port. From which port did he leave Japan?
- S: Yokohama.
- T: Yes. He left Japan from Yokohama Port. Do you know the name of the ship?
- S: (Silence)
- T: I think you can find the answer in the picture on page 24.
- S: Ar...gen...ti..na?
- T: Good. The name of the ship was 'Argentina.' It was a ship to carry immigrants or emigrants to a foreign country. Immigrants or emigrants are people who move to another country to start their lives in that country.(一板書しながら) Can you tell me the meaning of these words?
- S: 移民。
- T: Right. Argentina was a ship to carry immigrants or emigrants to another country. Now, do you know how long it took for him to go to America by ship?
- S: (Silence)
- T: I think you can find the answer in Section 2. Can you find the answer?
- S: あった。Two weeks.
- T: OK. Now let's read Section 2.

本文に関連した情報をあらかじめ調べておき、本文に書かれていないことをヒントにして考えさせるように工夫した。生徒が見落としてしまいがちな教科書の写真も Oral Introduction で取り扱える材料になった。生徒は予習として本文に目を通してきているので、それをもとにすぐに答えられそうな発問と、考えたりヒントをよく聞き取ったりしないと答えられない発問とを混ぜながら実施した。

事例 2 CD を活用した本文の導入

- ア 指導手順(Lesson3 Section2 での指導例)
 - (ア) ワークシート<資料1>を配布し、設問を確認させる。
 - (イ) 本文の内容に関する CD を聞かせる。
 - (ウ) 答えを記入させる。
 - (エ) ペアで答えを確認させた後、口頭で数人に答えを言わせる。

<資料1>

Q: What were the problems about the Nile and Egypt?

(1)

(2)

想定した解答 ① The Nile flooded every year and farmers working along the river suffered from the disaster.

② As the population in Egypt grew, more electricity was needed.

生徒の解答

- ① The Nile flooded every year.
- 2 Making a dam will make problems. / There already was a dam, but it didn't work well.

事前アンケートで「リスニングの練習をしたい」という意見が多かった。ALT に本文の要約を 作成してもらい、さらに、それを録音してもらい、CD を作成した。ネイティブの英語で聞き取 りをさせる機会として実施した。①に関しては予想通りで、後半の suffer from など未習のもの は聞き取れない生徒が多かった。②に関しては、様々な答えが出たが、どれも間違っていないた め、正解とした。その上で、In addition という表現を教え、それに注意して聞くように促し、再 度 CD を聞かせた。

設問をシンプルにしすぎたために様々な答えが出てしまったが、本文をよく理解するために必 要な情報を生徒に確認させることができ、結果的には効果的な導入になった。

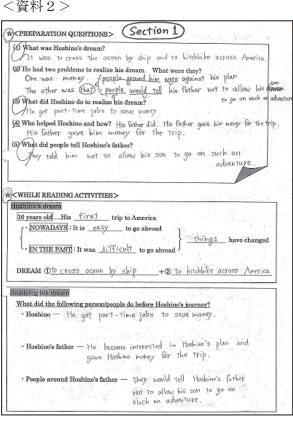
(2)「内容理解」に関する活動

事例 3 教師による英語での内容解説

- ア 指導手順 (Lesson 2 Section 1 での指導例)
 - (ア) ワークシート<資料2>を配布する。
 - (イ) CD で本文を聞かせる。
 - (ウ) ワークシートの空所に入る答えを生徒に尋 ねながら、教師が英語で内容をパラフレーズ して解説する。

イ 留意点

(ア) 英文をパラフレーズする際は、中学校での 履修語を中心に、できるだけ生徒が理解しや すい単語を用いるようにする。



本文に書いてあることのみを説明するような形になってしまい、やや単調になってしまった部分もあるが、生徒と内容について英語でやりとりはできた。ワークシートがあることで、生徒は何を聞かれているのかが想像でき、答えやすかったようだ。一方で、ワークシートに答えを書き写すことに集中してしまい、英語を「聞く」ことに意識がいかない生徒もいた。ワークシートを作成する場合は空所を短くする、長い文章を答えさせたい場合はワークシートには設問を書かずに口頭でやりとりするなど、教師が生徒に何をさせたいかをよく考える必要がある。

事例 4 教師による英語での内容解説と生徒 同士での 英問英答

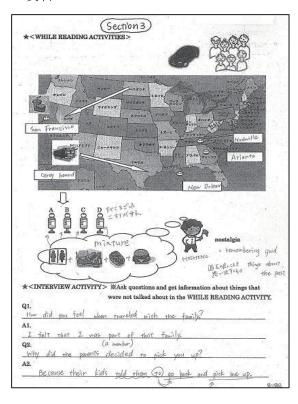
ア 指導手順 (Lesson 2 Section 3 での指導例)

- (ア) ワークシート<資料3>を配布する。
- (4) 教師が本文の内容についておおまかに英語 で説明し、生徒に必要事項をワークシートに メモさせる。
- (ウ) 教師が説明しなかった部分について、生徒 同士で英問英答をさせる。
- (エ) いくつかのペアに、自分たちが作成した英 問を発表させる。他の生徒には、英問の答え をワークシートに書かせる。
- (オ) 生徒が発表で触れなかった内容については、 教師が英語で質問し、英語で答えさせる。

イ 留意点

(ア) その後の活動に意味をもたせるため、最初 に内容の説明をする際は、細かい部分までは 触れないようにする。

<資料3>



生徒自身に問題を作らせるペアワークを取り入れたため、生徒を主体的に授業に関わらせることができた。教師が本文全体を説明してしまう場合に比べて、生徒の英語での発話量を増やすことができた。また、英問に答えるためには質問を聞かなければならないため、「聞く」燃性を作り出すことができた。生徒に「聞く」ことの目的を明確にさせることが重要である。

ワークシートは回収し、生徒が作成した英問を教師がまとめ、次時に復習として生徒に口頭で答えさせた。

事例 5 筆者の主張の読み取り

ア 指導手順

- (ア) 比喩表現が入っている文や、心情描写が含まれている文など、生徒に文の意味を深く考え させたい文章を教師が読む。
- (4) 筆者がその文章を通して伝えたいことは何かをペアで考えさせる。

- (ウ) 教師が英語で質問をしながら、生徒に自分たちが考えたことが合っているかどうかを確認 させる。
- (I) 英問の答えを参考にしながら、生徒に自分の解釈が合っているかどうか、もう一度ペアで 考えさせる。
- (オ) いくつかのペアを指名し、それぞれの解釈について発表させる。

イ 留意点

- (ア) 「ア 指導の手順」の(ウ)で尋ねる確認のための質問は、具体的で分かりやすいものにし、 生徒が答えやすく、正答を確認しやすいものにする。
- (4) 生徒にとっては難しいと感じる活動であるので、不安を減らすために常にペアワークで実施する。

Lesson 2 Section 4 での指導例

著作権保護のため、この部分は非公開とします。

①について

→本文では、「筋書きのない物語のなかで生きている」と例えているが、結局何が人生を形作っていくのかを考えさせ、筆者は何を伝えたいのかを理解させた。(英語のみでは難しいため、最初は日本語も交えて考えさせたが、最終的に答えは英語で表現させた。)

②について

→ However に着目させ、旅を経て、筆者の生活で変わったことと変わっていないことを英語で尋ね、表面的な生活そのものは変わっていないが、内面が大きく変わり、同じものが今までとは異なって見えるようになったということを理解させた。

筆者が生徒に伝えたいことや考えさせたいことは何かを読み取らせる活動だったため、本文への理解は深まったようである。抽象的なことについて英語で思考し、表現することは、1年生にはまだ難しい活動である。「筆者は何が言いたいのですか?」という質問では生徒は答えにくくなると考え、「何が人生を形作るのか」「何が変わっていなくて、何が変わったのか」というように、なるべく具体的に質問し、筆者の主張に気付かせるように工夫した。ペアワークを取り入れることで、少し難しい活動でも助け合いながら自分たちなりの答えを導こうとする姿勢が見られた。

事例 6 日本語ワークシートを基にした Story Retelling

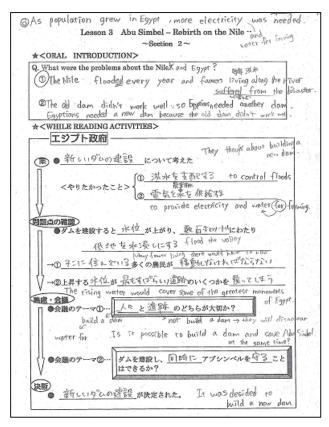
ア 指導手順 (Lesson 3 Section 2 での指導例) <資料 4 >

- (ア) 事前に本文の内容をまとめたワークシート<資料4>を配布し、日本語で穴埋めを させておく。
- (イ) ワークシートの内容に関しての教師の英語での質問に対して、ワークシートを見ながら英語で答えさせる。

イ 留意点

- (ア) ワークシートを英語で作成すると本文の 抜き出しになってしまうため、日本語での 穴埋め形式にする。
- (イ) 内容が整理しやすいワークシートを作成 する。穴埋めをする箇所も、質問部分にし たり、答えの部分にしたりする。形式も箇 条書きにしたり番号をふったりする。

本文が、エジプト政府がダムを造る決断に至るまでの過程を追っていく構成だったため、フ



ローチャートのようなワークシートを作成した。あえて日本語のワークシートにし、授業では英 問英答などを通して、英語で確認することにした。生徒の様子を見ながら、必要に応じて、日本 語で答えを言った部分もあった。日本語から英語への翻訳のような形式になってしまったが、生 徒は聞き取った質問に対して何とか英語で答えようとしていた。ストーリーの流れを追うような 本文では有効な手段であると考える。事前にワークシートの穴埋めをさせたことで、本文の概要 は把握している状態での活動になったため、生徒からは、「概要は分かっているので、英語で答え ることに集中できるからいい」という声があった。

事例 7 自分で描いた 絵を用いての 英語での本文説明

ア 指導手順 (Lesson 3 Section 3 の指導例)

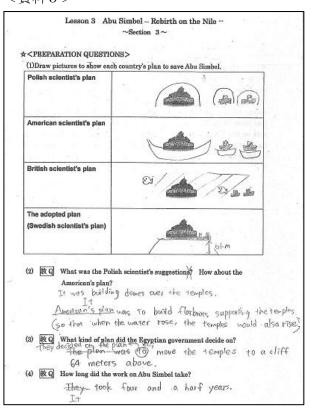
- (ア) ワークシート<資料5>を配布し、本文を読んで絵を描かせる。
- (4) 描いた絵を、ペアで確認させる。その後、生徒を指名し、黒板に絵を描かせる。
- (ウ) 教師が黒板の絵を用いて、本文の内容を英語で説明する。生徒の様子を見ながら、熟語や 構文などは必要に応じて日本語で説明する。
- (エ) ペアで、自分が描いた絵を用いて本文の内容を英語で説明させる。
- (オ) 生徒を何人か指名し、クラス全体に英語で絵の説明させる。

イ 留意点

- (ア) 最終的には教科書を見ないで Story Retelling ができるように、段階的に指導する。
- (4) 絵だけでは本文の内容を全てカバーできないため、ワークシートに英問英答を入れ、 教師が絵を用いて説明するときに、併せて 英問英答をする。

本文の内容を読み取り、それを絵で表し、その絵を用いて本文を自分なりの言葉で説明するという活動だったので、日本語をあまり介さずに実施できた。最終的には Story Retelling 形式の表現活動になった。ペアで練習してから前に出て発表させたため、指名された生徒は教科書を見ずに、自分の言葉で発表できていた。教師によるモデルの提示→十分な練習→発表という段階を踏んだこともあり、英語で発表することへの生徒の不安を軽減することができた。

<資料5>



(3)「表現活動・定着活動」に関する活動

事例8 ペアでの意見交換

ア 指導手順

- (ア) 本文の内容理解の後、そのセクションで読み取りのカギとなる部分について口頭で質問をする。教師が何回か質問を繰り返した後、何と問いかけているかをペアで確認させ、その後、質問を板書する。
- (イ) ワークシート<資料6>を配布し、自分の意見を書かせる。
- (ウ) ペアで意見を述べさせる。
- (エ) 自分が聞き取った相手の感想や意見を、ワークシートに書かせる。
- (オ) 相手の意見に対する感想や意見を伝えさせる。
- (カ) 何名かを指名して、発表させる。発表の後、その意見に対する感想などをクラス全体に聞く。
- (キ) ワークシートは提出させ、添削し、返却する。

イ 留意点

- (ア) 英語での活動とする。
- (4) 最初からワークシートは配布せず、質問を聞き取らせる。
- (ウ) 相手の意見や感想の要点をワークシートに書かせる。相手が言ったことを全て書くのではなく、要点を書くように指導する。

Lesson 2 での質問例

Section 1 ··· "What would you do if you were Michio's father?"

(自分に立場を置き換えて考えさせる質問)

Section 2 ··· "If you can travel abroad, do you want to plan things carefully before you go?

Or do you want to decide where to go on the spot?"

(自分に立場を置き換えて考えさせる質問)

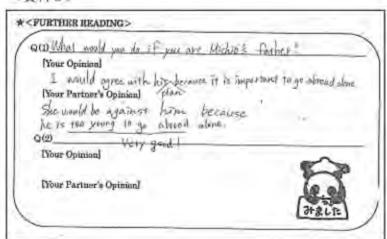
"What do you think was 'an idea' which Hoshino had after sleeping in the wilderness?"

(心情を推測させる質問)

Section 3…"Is there any smell/sound/taste which makes you remember something?

What is that?" (筆者の状況をより深く理解させる質問)

<資料6>





事前アンケートで「もっと意見を英語で言えるようになりたい」という意見を書く生徒が多かったため、この活動を実施した。生徒は何とか自分の意見を伝えようと積極的に取り組んでいた。また、相手の意見を聞いて、感想を伝えたり、自分のワークシートに書き留めさせたりしたので、相手の意見を聞き取らなければならない必然性を作ることができた。ワークシートに書き残させることで、教師が添削をし、それを生徒が見直すことができ、自分の間違いにも気付く機会を与えることができた。英語が苦手な生徒への配慮もあり、書いてから話すという形式で実施したため、本来の「話す」活動にはなっていない。徐々に即興で意見を話せる力を付けていくことを考えていかなければならない。

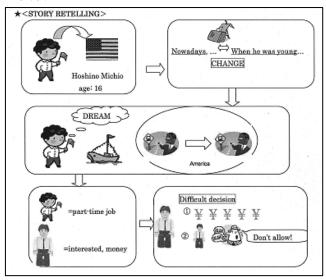
事例 9 Story Retelling

- ア 指導手順 (Lesson 2 Section 1 の指導例)
 - (7) 本文の流れが分かるようなキーワードや絵を載せたワークシート<資料7>を配布する。
 - (イ) 教師がワークシートを用いて、Story Retelling のモデルを示す。
 - (ウ) 生徒にペアで練習させる。
 - (エ) 生徒を指名し、一人1文ずつ retell させて、一つのストーリーにさせる。

イ 留意点

(ア) 本文どおりの再現でなくてもよいことを伝えるため、教師がモデルを示す際は、本文を言い換えて Story Retelling をする。 <資料 7 >

本文の内容理解を踏まえ、自分の言葉で内容を伝えるということを目標にこの活動を実施した。モデルとなる本文をそのまま「まねる」ことは確かに有効だが、それは音読や置換法(事例 10)で実施していることなので、この活動では自分の言葉でストーリーを再現するように指導した。生徒は一生懸命に取り組んではいたが、教科書の丸暗記に近い状態になってしまう生徒もいた。この点を考えると、一つのセクションという短い区切りではなく、1 レッスンの Story Retelling の方が効果があるように感じた。



事例 10 置換法によるペアでの音読練習

ア 指導手順

- (ア)「置換法プリント」<資料8>を配布する。
- (イ) ペアにさせ、一人に「置換法プリント」を見ながら、本文を音読させる。日本語になって いるところは、英語に直しながら音読させる。
- (ウ) もう一人には教科書を見ながら、自分のペアの音読が合っているか確認させる。自分のペアが英語を思い出せなかったり、間違ってしまったりしたときは、ヒントを与えるよう指示をする。
- (エ) 役割を交代しながら、何度か音読練習をさせる。
- (オ) 復習として、次の時間に、日本語の部分を英語で書かせる活動を行う。

イ 留意点

(ア) 新出単語や熟語など、 このセクションで定着さ せたい表現は日本語にす る。

教科書で何度か音読練習を した後に行う、自分で英文を 組み立てたり、単語を思い出 したりするという作業を加え た活動であり、毎セクション で実施している。

<資料8>

Lesson 3 Abu Simbel 置換法プリント ~Section 4~

最初は(2語), no one could 思いつく(2語) a way to 解決する the problem of Abu Simbel. Should they 犠牲にする a monument 改善するために(4語) the lives of the people? Or should they 犠牲にする the 幸福 of the people to save a monument? 実は(2語), there was a third way. Human 創意工夫 and international cooperation found a third way.

The new dam, the High Dam at Aswan, has 大いに improved the lives of 何百万もの(2語)people, and the great temples of Abu Simbel are still there. Ramses II is still 監視している(2語) his kingdom on the Nile. What kind of human history do you think he will see in the next 3,000 years?

1 -___ no.___ name

どこを日本語にするかで活動のレベルを調節することができる。また、生徒も本文のポイントがどこなのかが明確に分かる。英文の構造や熟語を意識させながら読ませることもできる。レベルが高すぎると、全員が終わるまでに時間がかかったり、生徒のモチベーションが下がったりするので、バランスを考えてワークシートを作成した。英語が苦手な生徒とペアになった生徒が、やりにくそうにしているという場面もあったので、教師が声かけを工夫する必要もあった。

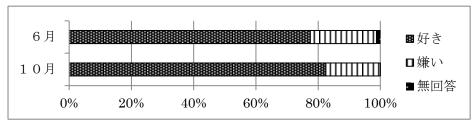
4 検証とまとめ

(1)事後アンケートによる検証

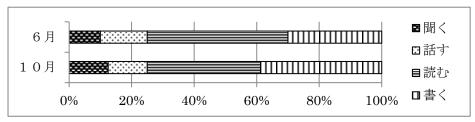
これまでの活動を通して生徒の意識がどのように変化したかを確認するために、同じ80名を対象に、事前アンケートと同じ内容のアンケートを実施した。

ア アンケート結果

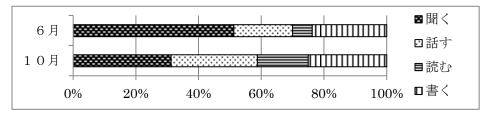
1 あなたは英語が好きですか?



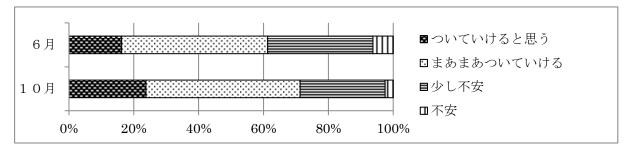
2 「聞く」「話す」「読む」「書く」の中で、最も得意なことは何ですか?



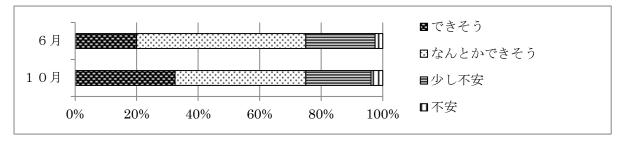
3 「聞く」「話す」「読む」「書く」の中で、最も苦手なことは何ですか?



- 4 生徒が英語に触れる機会を充実させるとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とする ために授業を英語で行うことについて、あなたはどう思いますか?
 - ①先生がたくさん英語で質問したり、説明したり、指示をしたりすることについて。



②自分が英語で質問に答えたり、ペアワークをしたり、発表をしたり、意見を書いたりすること について。



イ アンケート分析(6月と10月の比較)

4技能のうち得意なものとして「書く」ことを挙げるものが大幅に増えた。その理由としては、「話す」活動の前段階として、まずワークシートに意見などを「書く」作業を入れているからだと思われる。即興で話すという活動はまだまだ不足しており、生徒に「話す」ことに対する自信をつけさせるには至っていない。一方で、「聞く」ことを苦手とする生徒数が減っており、なるべく教師が英語で話したり、ペアワークで相手の話すことを理解しなければならない必然性を設けたりしたことが一定の効果を上げたのではないかと思われる。

4①にあるように、教師が授業を英語で行うことに対する不安感については6月と10月で大きな変化は見られなかったが、「ついていける」「まあまあついていける」が少しではあるが増加し、自信がついた生徒が増えたようである。しかし、約3割の生徒は不安を抱えたままであった。

(2) まとめ

内容理解を英語で進めること、本文の内容について自分の意見をもち英語で述べることの2点を中心に今回の研究を行ってきた。

生徒に英語で内容理解をさせるためには、教師側が本文を読み込み、どのような順序で何を重点化して理解させるかなどを綿密に計画しておかなければならないということを強く実感した。内容の大筋をつかませたいセクションと、行間を読ませたり筆者の主張を深く読み取らせたりしたいセクションでは、準備するワークシートや授業中に実施する活動、教師の発問も異なる。また、一方的に教師が英語で説明しても生徒の集中力は続かず受け身の授業になってしまうため、発問を工夫して生徒に答えさせたり、ペアワークのような活動を入れたりすることで、生徒が能動的に参加できるような授業になるよう配慮した。教師にも、文章の構成や筆者の主張をより深く読まなければならないという姿勢が身に付き、結果的に様々な角度から教材研究ができたと思う。

事前アンケートから、生徒は自分の意見を英語で伝えられるようになりたいと思っていることが分かったため、本文の内容について自分の意見をもち英語で述べさせるという活動を多く取り入れてきた。授業後のアンケートでは、この時間をもっと増やしてほしいという意見が多くあった。生徒が、本文にない表現も使用しなければならない場面も多くあったが、自分の意見を述べるために必要な表現であれば、覚えたいという気持ちも強くなるようであった。生徒の中には、本文をそのまま答えるのではなく、質問に応じて自分の言葉で置き換えるパラフレーズができるようになってきた生徒もいる。

しかし、どの事例においても、準備段階で教師がイメージした展開になったというわけではない。分かりきっている内容を英語で説明してしまい飽きさせてしまったり、発問の意図が伝わら

なかったりすることもあった。しかし、予想外の解答で他の生徒の理解が深まったり、表現の幅 が広がったりするなど、授業が活発になることの方が多かったのも事実である。

「正確に読める力」を身に付けさせることも英語教師には求められる。そのためには日本語による解説はどうしても必要になる場合もある。英語でのコミュニケーション力を伸長させるためには、「正確に読める力」と「英語を使える力」の両観点をいかにバランスよく時間配分して指導していくかを常に意識することが求められると考える。

研究事例2

英語 II における「導入」「内容理解」「表現活動・定着活動」に関する様々な指導事例

1 生徒の実態及び課題の設定~英語に関する事前アンケート結果から~

(1)事前アンケート

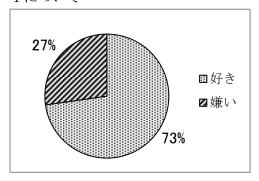
英語学習に対する意識を調査するために、平成 24 年 6 月に、以下のようなアンケートを実施した。今回のアンケートの調査対象は第 2 学年 33 名で、英語 II を 4 単位、ライティングを 2 単位履修している。

<実施したアンケート項目>

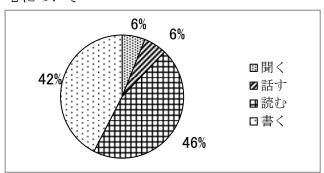
- 1 あなたは英語が好きですか?
- 2 「聞く」「話す」「読む」「書く」の中で、最も得意なことは何ですか?
- 3 「聞く」「話す」「読む」「書く」の中で、最も苦手なことは何ですか?
- 4 生徒が英語に触れる機会を充実させるとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面と するために授業を英語で行うことについて、あなたはどう思いますか?
 - ①先生がたくさん英語で質問したり、説明したり、指示をしたりすることについて。
 - ②自分が英語で質問に答えたり、ペアワークをしたり、発表をしたり、意見を書いたりすることについて。
- 5 英語の授業の中でどのようなことをしてほしいですか。(自由記述)

<アンケート結果>

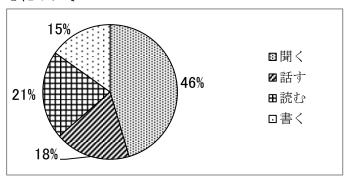
1について



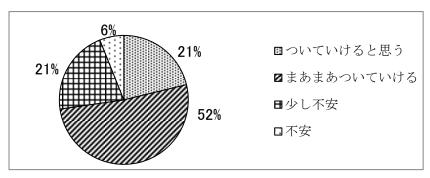
2について



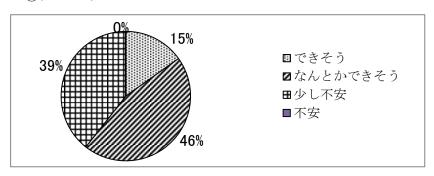
3について



4①について



4②について



5について<主なものを抜粋>

- ペアワークなどで、相手の言っていることが分かるようになる練習。
- ・ペアワークとかグループワークとか、英語で意見などを伝えること。
- ・上手く発音できるようになるような練習。
- ・長い文章を書けるようになる練習。
- ・一つの単語を使って、例文をたくさん書く練習。
- 長いリスニングでも聞き取れようになる練習。
- ・英語のニュースを聞き取れるようになりたい。
- ・長文を読めるようになる練習。
- 文法。

アンケートの結果、73%の生徒が英語を「好き」と回答した。日頃授業に前向きに取り組む生徒が多いことからも、英語を学ぶことに対して意欲的であると言える。「読む」ことを得意とする生徒が46%で、最も多かった。これは「英語の学習は読んで訳すこと」という思いが生徒の中に強くあり、「訳せること=読めること」と思っている生徒が多いためであると考える。また、「書く」ことを得意とする生徒が、42%となっているが、これは授業中に、新出語句などを用いて英文を書かせるという活動を毎時間実施しているためではないかと考える。一方、「聞く」ことを苦手とする生徒が46%であった。これまでに、授業では、英語を「聞く」場面を多く設定するよう心掛けてきたが、生徒にとっては効果的ではなかったと言える。生徒に何かを聞かなければならない必要性を感じさせることができず、ただ何となく聞いているという状態が多かったのではないか、また、聞いたことを、書いたり別の人に話したりして伝えるというような統合的な指導が不足していたのではないかと考える。教師が英語を使用することに対して全体の73%の生徒が「ついていけると思う」「まあまあついていけると思う」と前向きな回答をしていた。一方、4②

の自分が英語を使用することに対しては、やや数値的には減少するが、61%の生徒が「ついていけると思う」「まあまあついていけると思う」と回答していること、「不安である」と回答した生徒が誰もいなかったことから、生徒が英語で行う授業に対して大きな抵抗を感じているわけではないことが分かった。

(2) アンケートから考える課題と到達目標

授業を英語でのコミュニケーションの場面とするためには、「聞く」ことに対する苦手意識を減らすことが大きな課題である。まずは、教師が、分かりやすい英語を用いることに留意しながら英語の発話を更に増やし、インプットの量を増やすような指導の工夫が求められる。また、授業中に行う活動の中で、「聞く」必要性を強調し、生徒に「今なぜ相手の話している英語を聞かなければならないか」ということを意識させたり、得意と感じる生徒が多い「書く」活動へとつなげる統合的な指導をしたりすることも必要である。さらに、英問英答などを含めたペアワークやグループワークを多く取り入れ、「話す」ことへの抵抗感を減らすことも重要である。

このような指導を通して、英問英答も含めた英語でのやりとりやペアワークなどを授業の中心とすることで、英語を聞いたり話したりする活動を日常化し、相手の意見を聞いて理解できる力を身に付けさせることを到達目標とした。また、聞き取ったことや読み取ったことに対して、自分の言葉で答えられる力や、自分なりの意見をもつことができるような力も身に付けさせ、得意とする「読む」ことや「書く」ことを更に伸ばしながら、4技能を総合的に伸長させることも目標とした。本文の内容理解の定着、深化を図るため、本文の内容に関する発表をさせるという最終的なゴールを設定し、それをレッスンの初めから生徒に示しながら段階的に指導することで、目標をもって活動に取り組めるような授業を目指した。

2 本研究の流れ

本研究では、Lesson 3 The Wonderful World of Smells と Lesson 4 Me, Quit? Never において、「導入」「内容理解」「表現活動・定着活動」として下表にある 9 の事例を授業の中で実践した。 使用教科書: PROMINENCE English II (東京書籍)

	導入	内容理解	表現活動・定着活動
L3	・実物を用いての英語によ	・新出単語・熟語を用いての英作文	· Show and Tell
	る Oral Introduction	(事例3) *各パートで実施	(事例8)
	(事例1)	・英英辞典を活用しての新出単語・熟語	
		の確認(事例 4) *各パートで実施	
L4	・Wikipedia(英語版)を	・T/F Question による内容理解	・自分を語る(事例9)
	用いての英語による	(事例 5) *各パートで実施	
	Oral Introduction	・ワークシートを用いた内容理解	
	(事例2)	(PLOT をつかむ) (事例 6)	
		* L 3 で実施	
		・ワークシートを用いた内容理解(場面	
		や心情の変化をつかむ)(事例7)	
		* L 4 で実施	

3 実践内容

(1)「導入」に関する活動

事例1 実物を用いての英語による Oral Introduction

ア 指導手順 (Lesson 3 の指導例)

- (ア) 5種類の制汗スプレーを示しながら、その香りについて英語で説明をする。
- (イ) 5人の生徒を指名し、英語でやりとりをしながら、それぞれにどの香りの制汗スプレーがいいかを選ばせる。
- (ウ) 実際にスプレーをし、香りの印象や、気分が変わったかなどを英語で尋ねる。最初は教師 が尋ね、次は生徒に尋ねさせる。
- (エ) ペアにさせ、生徒に制汗スプレーを使っているかどうかをお互いに尋ね合わせ、英語でやりとりをさせる。
- (オ) 制汗スプレーを使っている場合は、どのような香りか、なぜその香りを選んだのか、その香りはどのような効果があるかを英語で話し合わせる。
- (カ) 二つのペアでレポートをさせる。自分のことではなく、自分の相手のことについて、もう 一方のペアに英語で報告をさせる。

イ 留意点

- (ア) 制汗スプレーは紙で覆い、生徒には何の香りかは見て分からないようにする。
- (イ) 教師はなるべく易しい英語を用いるようにする。また、本文に出てくる新出単語や熟語を 意図的に使うようにする。
- (ウ) 「ア 指導手順」の(ウ)では、教師だけが質問し、指名された生徒だけが答えていると生徒の発話量が増えないため、生徒にも質問させるようにする。
- (エ) 最後はレポート形式の活動にし、相手の言うことを聞いて、それを別の人に話して伝えさせて、「聞く」と「話す」を統合的に指導する。

生徒にとって身近な制汗スプレーを題材にしながら、 香りの種類や効果について話合いをさせた。生徒は楽し そうにやりとりをしていた。また、自分の相手のことを 別のペアにレポートをする活動を実施したので、正確に 伝えるために、やりとりの最中に聞き返したり、確認し たりする姿が見られた。



事例 2 Wikipedia (英語版) を用いての英語による Oral Introduction

ア 指導手順(Lesson 3の指導例)

- (ア) 教師が 13 歳だったときの出来事を英語で紹介する。その後、生徒をペアにし、13 歳の時の出来事や思い出を自分のペアに英語で伝えさせる。
- (4) ベサニー・ハミルトンが片腕でサーフィンをしている写真を見せる。なぜ彼女がこのような状態でサーフィンをしているのかをペアで考えさせる。

- (ウ) 二つのペアでレポートをさせる。自分たちが推測した内容を別のペアに英語で伝えさせる。
- (エ) ベサニー・ハミルトンに関する英語版の Wikipedia を生徒に配布し、ベサニーが 13 歳の 時に何が起こったのかを読み取らせる。
- (オ) 読み取ったことを、ワークシート<資料1>に、英語で時系列にまとめさせる。

イ 留意点

- (ア)「ア 指導手順」の(イ)では、教科書を閉じさせ、 教科書と異なる写真を見せながら、英問英答をする。
- (イ) 生徒に「続きを知りたい、読みたい」という気持ちをもたせるように、教科書の内容を全て説明しないようにする。特に、ベサニーの心情については触れず、出来事だけを扱うようにする。
- (ウ) 生徒が読みやすいように、Wikipedia の文章はそのまま使うのでのではなく、必要な箇所を抜き出したり、難しい表現は書き換えたりする。
- (エ) ワークシートの答えは、本文を読み進めながら確認するようにする。

予習をしてきているため、すでに本文を読んでいる生 徒が多いこと、説明しすぎると本文を読む必要がなくな

<資料1>

Year	Bethany's age	Occurrence(what happened)
1990	0	· She was born in Hawaji.
(February 8)		
2.003	13	· She was attacked by a tiger
(October 31)		Shark and her left arm was
(-0-		hitten off.
2.003		billien off.
(November)	13	· She decided to return to surfing
(1.00-1.7)		and less than one month after
		the accident She returned to her
		board.
2004	13	· She entered a major competition
(Jonualy)		
	1 n	· She wrote about her experience
2004	14	in autobiography "Soul Surfer."
		In autobiography John Jurier.
2011	21	· A docudrama feature film "Soul
		Surfer" was released in America
		Daller Mas Lacocca III
2012	22	· "Soul Sufer" was released in Japan

ることの2点に注意して活動を実施した。Wikipedia は一人でじっくり読ませた後、分かりにくかった箇所などをペアで確認させた。教科書には載っていない情報などもあり、生徒は興味をもって読んでいる様子であった。あえてワークシートの答え合わせはせずに、本文でその箇所がでてきたときに確認することにして、本文を「読む」意欲を損なわないような工夫をした。

(2)「内容理解」に関する活動

事例3 新出単語・熟語を用いての英作文

ア 指導手順

- (ア) 新出単語・熟語の発音を練習する。
- (イ) 新出単語・熟語の中から、用法の難しいものや生徒が間違えそうなものを教師が選び、板書する。
- (ウ) 板書されている新出単語・熟語を用いた英文を作らせる。
- (エ) ペアで、お互いに作成した英文を比べ合う。
- (オ) ボランティア、又は教師が指名した生徒に自分が書いた英文を板書させる。
- (カ) 教師、又は他の生徒が板書された英文に対してコメントをする。

イ 留意点

- (ア) 作成する英文の内容は、できるだけ身近なものにさせる。
- (4) 英文はあまり長すぎないものにすること、ただし、単文ではなく重文または複文にするこ



とを指示する。

この活動は単語や熟語の意味を理解させるだけでなく、実際に文章の中で使えるようにさせることを目標にしたものであり、各パートの導入の際に必ず実施している。英文を板書させる生徒は、当初は教師が指名していたが、徐々に生徒が自発的に板書するようになった。教師や他の生徒の反応を楽しみにしたり、励みにしたりしているようであった。あまり簡単すぎる文章だと他の生徒から「もっと、もっと」などという声かけがあったり、印象に残る文だと賞賛されたりする場面も見られるようになった。英文を作るときに、記録として書くのではなく、相手に伝えるために書くということを何度も指導した。生徒もそのことを意識するようになり、英文のレベルも少しずつ上がってきている。

事例4 英英辞典を活用しての新出単語・熟語の確認

ア 指導手順

- (ア) 新出単語・熟語を5~6語選び、英英辞典のそれぞれの語の定義を教師が読む。
- (4) 教師が読んだ定義はどの語のものだったかをノートに書かせる。
- (ウ) 再度定義を読みながら、一斉に語を答えさせる。

イ 留意点

- (ア) 英英辞典の定義が難しいときは、教師が分かりやすい語で言い換える。
- (イ) 書いた語は、自分でスペルを確認させる。

「聞く」ことに関しての指導の一つとして考えた活動である。クイズのような形式であるため、難しいものでも真剣に考え、生徒は積極的に取り組んでいる。すぐに分かる語と、なかなか分からない語とを意図的に盛り込み、飽きさせないような工夫をしている。生徒から自分たちも出題したいという声があったため、生徒自身に定義を考えさせて全体に出題させたり、ペアで出題させ合ったりするなど、様々な方法で実施している。事例3と事例4を組み合わせて各パートの導入で実施している。

事例 5 T/F Question による内容理解

ア 指導手順

- (7) 最初に教師が口頭で T/F Question を出題し、生徒に答えをメモさせる。
- (4) ペアでお互いの解答を確認させる。ペアで解答が合わない場合もあるので、確認後、再度 口頭で T/F Question を出題する。
- (ウ) 本文の内容を確認する。
- (エ) 最後に T/F Question の答え合わせをする。誤答が多いと予想される質問は板書する。

イ 留意点

(ア) T/F Question はレベルを変え、生徒が答えやすい質問と、よく考えなければ答えられな

い質問を混ぜる。

(イ) T/F Question は、本文のポイントになるところ、生徒が読み違いをしやすいところを出題する。

T/F Question を出題することで、生徒にどこを意識して読めばよいのかを示すことができ、 内容理解の一助になった。また、最後に答え合わせを行うことで、内容理解の確認にもなった。

事例6 ワークシートを用いた内容理解(PLOT をつかむ)

ア 指導手順 (Lesson 3 Part 2 での指導例)

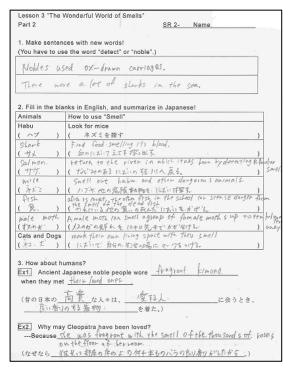
- (ア) ワークシート<資料2>を配布し、空所を 埋めさせる。
- (4) ペアでお互いの解答を確認させる。解答が 合わない場合には、教科書をもう一度読み直 し、再度解答させる。
- (ウ) 英問英答の形式で全体で答えを確認する。

イ 留意点

(ア) ワークシートに英語を日本語で説明する箇 所を設け、本文の和訳はしない。

具体例が列挙されている内容であったため、英語で PLOT をつかみやすいと考えて実施した。生徒にとっては取り組みやすい内容であったこと、英文の文章自体の難易度があまり高くなかったこ

<資料2>



となどから、迷うことなく正解にたどりついた生徒がほとんどであった。生徒の様子を見ると、 ワークシートの中で日本語を書かせる作業は必要なかったと考える。

事例7 ワークシートを用いた内容理解(場面や心情の変化をつかむ)

ア 指導手順 (Lesson 4 Part 4 での指導例)

- (ア) 事例5の本文の内容に関する T/F Question をする。
- (イ) ワークシート<資料3>を配布する。ワークシートの設問(英問英答、場面の絵を描く) に答えさせる。
- (ウ) 第1段落に関しては、登場人物の行動から、そのときの心情の変化を推測させ、英語で書くという設問にも答えさせる。
- (エ) 自分が考えて書いた主人公の心情の変化をペアで伝え合う。

イ 留意点

(ア) 設問に答えながら、本文に書かれている内容を確認させ、段落で場面が変わっていること

を認識させる。

(4) 主人公の行動の裏にある気持ちの変化を読み取ることが重要なので、ワークシートにそのための設問を作成する。

段落が変わるところで、大きく場面が変わっているため、生徒の理解の助けとなるようこの活動を実施した。また、その場面転換の前後から、本文に書かれていない主人公の心情変化を推測させ、理解を深めさせたいと考えた。生徒は本文を何度も読み返しており、本文中の一つの単語などから、主人公の気持ちの変化を読み取る努力をしていた。事例9につなげる活動として有効であった。

(3)「表現活動・定着活動」に関する活動

事例 8 Show and Tell

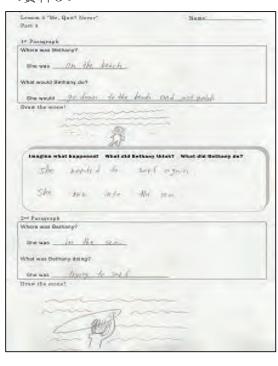
- ア 指導手順 (Lesson 3 での指導例)
 - (ア) ワークシート < 資料 4 > を配布し、自分が紹介したい香りについて英語でまとめさせる。 紹介する内容は、自分の好きな香り、好きな理由、その香りの効果など、とする。
 - (イ) 実物、又は絵を準備させる。
 - (f) 教師がモデルを示す。教師の Show and Tell に対して、生徒に質問をさせる。
 - (エ) まずはペアで、次にグループで Show and Tell をさせる。
 - (オ) 聞いている生徒には、発表後に必ず質問をさせたり、感想を述べさせたりする。

イ 留意点

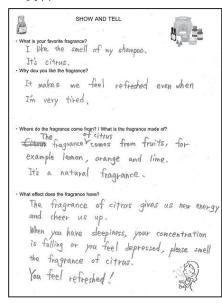
- (ア) ワークシートに書いた文章を読むだけにならないよう、 発表するときにはワークシートを見ないで発表させる。
- (4) 聞いたことに関して必ず意見を言ったり、質問したりさせることで、「話す」こととの統合的な指導にする。
- (ウ) 発表内容に関しては、聞いている友人たちが知らないことを教えてあげるつもりで発表するように指導する。

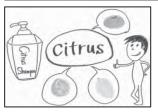
「相手に伝える」ことを意識し、好きな香りについていろいると調べたり、教科書に出てきた単語や聞いてわかるような易しい単語を用いたりしながら、何とか自分の伝えたいことを表現しようとする生徒が多かった。ワークシートを見ないで発表させたことで、生徒は言葉を付け足したり、ジェスチャーをしたりしながら発表しており、文の暗唱ではなく、自分の言葉で効果的に伝える活動になった。

<資料3>



<資料4>





事例 9 自分を語る

指導手順(Lesson 4 の指導例)

- (ア) Part 3 に、Imagine you may never again be able to do the thing you love most. How do you feel? と主人公が問いかける文章がある。 この問いに対する主人公の答えをワークシート <資料5>にまとめさせる。
- を出し、どのように行動するか、その理由は何 かを考えさせて、ワークシートにまとめさせる。
- (ウ) まずはペアで、次にグループで自分の意見を 発表させる。
- (エ) 聞いている生徒には、発表後必ず感想を述べ させたり、質問をさせたりする。

(イ) 同じ問いに対して、自分ならどのような答え

<資料5>

Lesson4 How would you feel? P50 line1-2 * In case of Bethany · What is the thing that Bethany's loves most the loves surfing most. How did Bethany answer this question? And, why did Bethny feel that? She answered that she felt sad, angry and shocked I think she felt sat and shocked because she might never surf again. The felt orgry because the tiger shark deprived only her * HOW ABOUT YOU? · What is the thing that you love most? I love soccer most. . How would you fell if you might never be able to to the thing you love most? And how would you behave? I would feel very sad and shocked. At first, there is no hope and I might never talk with people. I would throw away everything that is concerned soccer. But later, like Berhany, I would try to everything that enabled me to play soccer again. I want to play soccer as long as I live.

イ 留意点

- (ア) 自分の考えをまとめるヒントになるよう、主人公の意見をまとめさせた後に自分の意見を まとめさせる。
- (イ) 聞いたことに関して必ず意見を述べたり、質問したりさせる。

レッスンの最後の活動として実施した。サメに襲われ、片 腕をなくしても大好きなサーフィンをあきらめなかった少女 の話が取り上げられているため、自分だったらどうかという ことを考えさせた。自分について考え、それを英語でまとめ、 相手に伝えるという3段階の活動であったので、生徒にとっ て難易度が多少高い活動であったが、主人公と自分とを比較



したり、ジェスチャーを用いたりして、工夫しながら取り組んでいた。どのようにしたら相手に とって分かりやすい発表になるかを意識できるようになったようだ。

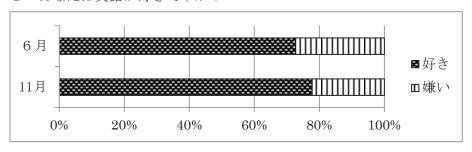
検証とまとめ

(1) 事後アンケートによる検証

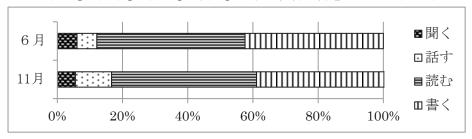
これまでの活動を通して生徒の意識がどのように変化したかを確認するために、事前アンケー トと同じ内容のアンケートを実施した。

ア アンケート結果

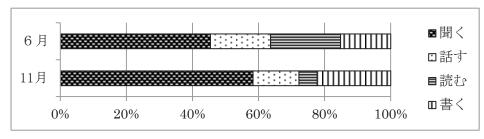
1 あなたは英語が好きですか?



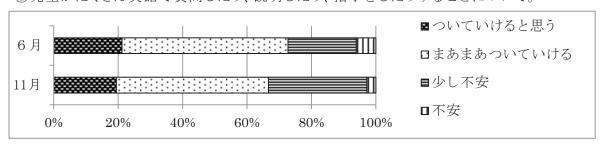
2 「聞く」「話す」「読む」「書く」の中で、最も得意なことは何ですか?



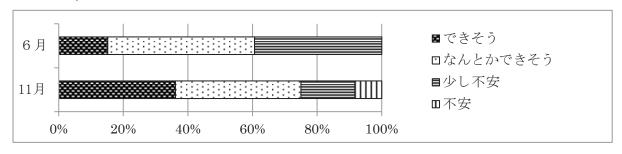
3 「聞く」「話す」「読む」「書く」の中で、最も苦手なことは何ですか?



- 4 生徒が英語に触れる機会を充実させるとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とする ために授業を英語で行うことについて、あなたはどう思いますか?
 - ①先生がたくさん英語で質問したり、説明したり、指示をしたりすることについて。



②自分が英語で質問に答えたり、ペアワークをしたり、発表をしたり、意見を書いたりすることについて。



イ アンケート分析(6月と11月の比較)

アンケートの結果、英語を「好き」だと回答している生徒が少しではあるが増加した。得意なことでは6月と同様に「読む」ことが44%で、最も多かった。「話す」ことが得意であると回答した生徒が、全体の数からすると少ないが、約2倍になった。一方、苦手なことは「聞く」ことと「書く」ことが増加した。授業で「聞く」場面を多く設定するよう心掛けてきたため、正確に聞き取らなければいけないという負担感を生徒に感じさせてしまったのではないかと考える。また、まとまった文章を書く活動が増えたため、自分が思うような文章が書けず、「書く」ことを苦手と思ってしまったのではないかと考える。

教師が英語を使用することに対して「ついていけると思う」「まあまあついていけると思う」と回答している生徒がやや減少した。「聞くこと」への苦手意識が増えたことと関連しているのではないかと推測できる。一方、4②の自分が英語を使用することに対しては「ついていけると思う」「まあまあついていけると思う」と回答する生徒が、61%から75%に増加した。生徒がペアワークなどを通して、英語で発話したり自分の意見を発表したりすることに対して前向きになっていることが分かった。

(2) まとめ

事前アンケートの結果を受けて、英語のインプット量を増やし、英語でのコミュニケーションに欠かせない「聞く」力を身に付けさせることを到達目標として実践を行ってきた。授業中に英語を使用する量が増えれば増えるほど、どのような形であれ生徒が英語を耳にする量は増えているはずなのだが、「聞く」ことが苦手と感じる生徒が増えてしまった。相手の言いたいことが正確に聞き取れない、教師の言うことが全て理解できないと苦手と感じてしまっているようである。完璧に正確に聞き取ることも大切であるが、相手の伝えたいことを理解しようとして積極的に聞く姿勢も大切であるという指導が必要であった。

聞き取ったことや読み取ったことに対して、自分の言葉で答えられる力や、自分なりの意見をもつことができるような力を身に付けさせるために、この研究の中で、発表の機会を2回設定した。発表に向けて、授業の中で本文の内容に関して、どう思うか、なぜそう思うのか、という問いかけを多く行った。生徒は今までのように訳せばそれでよいのではなく、その英文が伝えたいことを意識して英文を読むようになってきた。発表の準備でも、本文を何度も読み返したり、友人に相談したりしながら、英語で考え伝える努力をしていた。発表の後、「またやりたい」という意見がとても多く、理由を聞くと「達成感がある」「英語で考えるのは勉強になる」「自分も考えて発表の内容を作るので、周りの人がどんなふうに発表するかを聞きたい」というような意欲的なものが多かった。

授業中に英語を使用する場面を多く設定し、読んだり書いたりするだけでなく、聞いたり話したりする活動を意図的に実施することで、生徒は徐々に発話する量も増え発話の内容も充実してきている。そのような生徒の様子を見ていると、英語でのコミュニケーション力は伸長していると考える。生徒は、英問英答をはじめ、授業中の英語でのやりとりにもほとんど抵抗がなくなってきたようである。生徒のノートを見ると、今までは和訳と板書事項のみが書いてあったが、英語でやりとりをした箇所や、その際自分が分からなかった箇所などがチェックしてある。授業に取り組む姿勢も少しずつ変化してきたように思う。

今回実践してきた内容は、投げ込み式の大がかりな活動ではなく、日常的に実施したものが多

い。「英語で授業を行う」ということが強調して言われている。そのためには、教科書で扱われていることをベースに、教室を実際のコミュニケーションの場にして、生徒に英語を使わせることが大切な要素になる。これは、決して難しいことでも、高いハードルでもない、ということがこの研究を実践しての感想である。教師のちょっとしたアイデアがあれば、道具は黒板、チョーク、教科書、シンプルなワークシートだけで、生徒の英語でのコミュニケーションに対する意識を高めることができる。生徒は、英語を話せるようになりたい、話せるとかっこいいと少なからず思っている。授業中の生徒の様子を見ていると、その思いを上手に引き出し、学ぶ意欲を高めることが、「話す」力だけではなく、他の技能の伸長にもつながると考える。

生徒も教師も、授業中に英語を使うことは、多くの面でプラスになることがあると感じた。授業にめりはりもつき、何より生徒が積極的に主体的に学習に取り組む姿勢がでてきて、活気のある授業が展開できるようになった。今後も継続して、生徒の英語能力を伸長できるよう、生徒をいかに英語で活動させるかを考えた授業を実践していきたい。

研究事例3

1レッスンを通しての「導入」「内容理解」「表現活動・定 着活動」に関する様々な指導事例

1 生徒の実態及び課題の設定~英語に関する事前アンケート結果から~

(1)事前アンケート

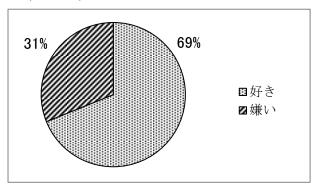
6月末に英語学習に対する意識を調査するために、以下の項目でアンケートを実施した。今回 アンケート対象は、第2学年45名である。英語Ⅱを3単位、ライティングを3単位履修している。

<実施したアンケート項目>

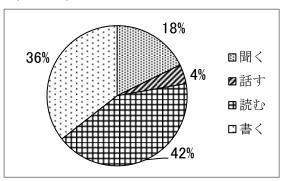
- 1 あなたは英語が好きですか?
- 2 「聞く」「話す」「読む」「書く」の中で、最も得意なことは何ですか?
- 3 「聞く」「話す」「読む」「書く」の中で、最も苦手なことは何ですか?
- 4 生徒が英語に触れる機会を充実させるとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面と するために授業を英語で行うことについて、あなたはどう思いますか?
 - ①先生がたくさん英語で質問したり、説明したり、指示をしたりすることについて。
 - ②自分が英語で質問に答えたり、ペアワークをしたり、発表をしたり、意見を書いたりすることについて。
- 5 英語の授業の中でどのようなことをしてほしいですか。(自由記述)

<アンケート結果>

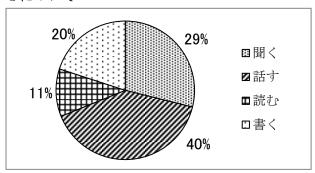
1について



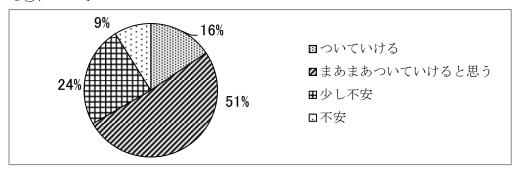
2について



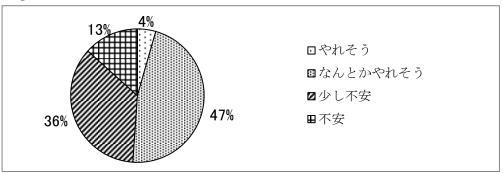
3について



4①について



4②について



5について<主なものを抜粋>

- ・1年生の時にやっていた絵を描いての発表。(絵を用いての Story Retelling)
- ・1年生の時にやった、自分達で内容をまとめて、覚えて発表すること。
- ・何かテーマを決めて、それについて英語で話すこと。
- 長文を読むこと。
- ・英語でのコミュニケーション、日常会話。
- ・進研模試などの長いリスニングでも聞き取れる練習。
- リスニングの問題。
- 速読。
- 文法の練習。

アンケート集計の結果、約7割の生徒が英語を「好き」と回答している。「読む」ことを得意とする生徒が42%、「書く」ことを得意とする生徒が36%であった。一方、苦手なことは「聞く」こと(29%)、「話す」こと(40%)で全体の約7割を占めた。授業では、和訳や音読の活動が多く、英語を話したり、英語を聞いたりする活動が少ないことが理由であると考えられる。教師が英語を使用することに対して全体の67%が「ついていける」「まあまあついていけると思う」と前向きな回答をしているが、4②の自分が英語を使用することに対しては51%とやや数値的には減少する。「聞く」ことや「話す」ことに苦手意識があるためではないかと考える。やりたいことでは、1年生の時に実施していた絵を用いてのStory Retellingと記述した生徒が何人もいた。

(2) アンケートから考える課題と到達目標

今回のアンケートでは「聞く」ことと「話す」ことを苦手とする生徒の割合が多かった。英語でのコミュニケーション力を身に付けさせるためには、これは大きな課題と考える。

まずは、教師の英語での発話をさらに増やしたり、本文の内容理解において英問英問などを取り入れたりしながら「聞く」ことに慣れさせ、苦手意識を減らす工夫をすることにした。また、ペアワークやグループワークを多く取り入れ、話さなければならない場面を設定することで、「話す」ことへの抵抗を減らしたいと考えた。

生徒から「Story Retelling をやりたい」という意見が多くあったことから、絵を用いながら Story Retelling 形式での発表や、本文の内容を基にした意見発表を実施することを最終的なゴールとして生徒に具体的に示した。その目的に向かって一つのレッスンの中で段階的な指導を行うことで、「話す」ことや「聞く」ことに必然性を与え、生徒に自然に話す力や聞く力を身に付けさせることを到達目標とした。

2 本研究の流れ

本研究では、Lesson 2 と Lesson 3 において、「導入」「内容理解」「表現活動・定着活動」において、パートごとに段階的指導をしていくことを意識しながら、下表にある流れで一つのレッスンの指導をした。

使用教科書: UNICORN ENGLISH COURSE II (文英堂)

レッスンごとの指導の流れ (段階的指導)

Lesson 2 (事例 1)	内容理解 ⇒	ワークシートを用いての本文の定着	\Rightarrow	Story Retelling
Lesson 3 (事例 2)	内容理解 ⇒	ワークシートを用いての本文の定着	\Rightarrow	意見の発表

3 実践内容

事例 1 Lesson 2 SLEEPING WITH LIONS

単元の評価規準

コミュニケーション	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化について
への関心・意欲・態度	外国暗衣规切能力	グト国帝理解り記刀 	の知識・理解
・ペアワークにおいて、	・本文の要約文を書くこ	・野生動物との関わりに	・主人公の言動から、
協力しながら会話を	とができる。	ついての文章の内容を	思いやる心の大切
続けようとしている。	・本文の内容を Story	読み取ることができ	さについて自分の
・JTE の質問に工夫を	Retelling することがで	る。	意見をもつ。
凝らして答えようと	きる。	・Oral Introduction を聞	・動名詞の用法を理
している。		き取ることができる。	解している。

(1) Part 1 の指導

- ア Lesson 2 に入る際に Oral Introduction を実施し、生徒とのインタラクションを増やす。
 - (ア) 世界地図を配布し、英語でやりとりをしながらカラハリ砂漠の場所を確認させる。 <教師からの問いかけ例>
 - T: Do you know where the Karahari is?
 - T: Please circle the Karahari. You can talk with your partner.
 - (4) カラハリ砂漠にはどのような動物が住んでいるかを生徒に推測させる。ペアで考えさせ、

黒板に考えた動物を書かせる。

(ウ) カラハリ砂漠に住んでいる動物について、写真や図鑑を用いて説明する。大きさや何を食べるかなど、生徒に問いかけながら説明する。生徒が本文を理解する際のスキーマになるよう、最後にライオンの絵を用い、具体的な質問をしながらやりとりをする。

実際に使用した写真の例

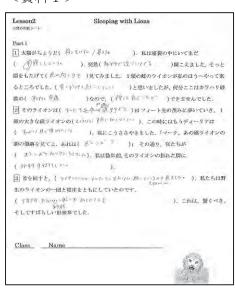




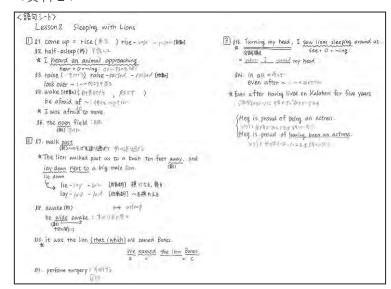


イ 和訳穴埋めシート<資料1>、語句シート<資料2>、ワークブックの新出単語を事前学習 させる。

<資料1>

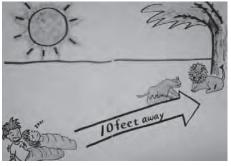


<資料2>



ウ Part1の本文の内容を表す絵を用意し、本文理解の前にストーリーの概要を英語で説明する。









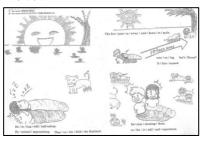
- エ 新出単語の意味をペアで確認させた後、口頭で意味を確認する。(英語)
 - (例) T: What does "asleep" mean? S: "Asleep" means \sim .
- オ 和訳穴埋めシート<資料1>をペアで確認させる。
- カ 和訳穴埋めシートを用いて本文の内容を確認する。重要語句や表現、新出文法項目については、語句シート<資料2>を使って説明する。(日本語) <資料3>
- キ 本文の音読練習をさせる。その後、音読シート<資料 3>を用いて音読練習をする。
- ク 教科書だけを見てサマリーシート<資料4>(P38 に 掲載)を完成させる。
 - (ア) 日本語サマリーを完成させる。
 - (4) (7) を英語サマリーに直させる。教科書の文章を活用できるような設問になるよう工夫する。
 - (ウ) ペアで英語サマリーを確認させる。
 - (エ) Chorus Reading をさせながら、英語サマリーを確認させる。
 - (オ) 英語サマリーの音読の練習をさせる。Read and Look up の形式で行う。
- ケ ウで用いた絵と同じものをワークシート<資料5>に し、絵とキーワードを使って Story Retelling をさせる。

(2) Part 2 ~ Part 4 の指導

基本的に同じ手順で実施した。生徒の様子から、Part 2 からは、ク(ア)の日本語サマリーは必要ないと考え、英語の質問に答えさせながら英語サマリーを完成させる形式にしたく資料 6 >

| LESSON 2 PART 1 | 日本語 | 日本

<資料5>



エンフィス・ツめれこともに! フハリ砂液に住んだめとでさえも / 年間 / ればなおびっくりするようなすばらしい経験で

(P38 に掲載)。英問の意味を確認させるため、英問には補助として日本語も並記した。ケの絵(資料5)を用いての Story Retelling は、Part 1 では実施したが、残りの四つの Part はまとめて Story Retelling し、Lesson 2 のゴールとすることを生徒に伝えた。

基本的な授業パターン

 1時間目
 内容理解 (30分)
 定着活動 (10分)

 専入
 穴埋め和訳シートの答え合わせ サマリーシートの穴埋め (適宜説明を加える)
 ペアでサマリーの確認 本文の音読練習

2時間目 定着活動(40分) 導入 英語サマリーの答え合わせ 英語サマリーの一斉音読 と 英語サマリーの Read and Look up め *Part 1 のみ Story Retelling

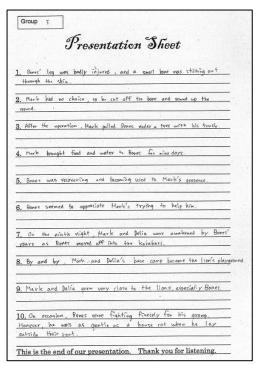
(3) Part 5 の指導

- ア Part1のイ~キまでと同じ手順で指導する。
- イ 教科書だけを見て、英問英答のみのサマリーシート<資料7>(P38に掲載)を完成させる。
 - (ア) 英語の設問に答えながら、英語サマリーを完成させる。
 - (イ) ペアで英語サマリーを確認させる。
 - (ウ) Chorus Reading をさせながら、英語サマリーを確認させる。
 - (エ) 英語サマリーの音読の練習をさせる。Read and Look up の形式で行う。
- ウ Story Retelling (発表)
 - (ア) 復習として、Part 1 で教師が書いた絵を再度見せ、教師が Story Retelling をしながら英語でやりとりをする。
 - (4) $Part 2 \sim 5$ に関しては、グループに分かれ、各 Part のサマリーと絵を完成させ、発表させる。

具体的な指導手順

- 1) ワークシート<資料8>を配布し、各グループでサマリーを完成させる。完成したサマリーは提出させて、教師が誤りを訂正する。
- 2) 絵を作成し、サマリーを暗唱させる。
- 3) グループ内で十分に練習させた後、クラス全体で発表させる。

<資料8>



生徒が描いた絵の例







発表後の生徒の感想 *主なものを抜粋

<よかった点・自分のためになった点>

- ・グループでよく話し合って協力することができた。どうすれば分かりやすく伝えられるか をみんなで考えるといい案がでることが分かった。
- ・本文をいかに短くして、聞いている人に分かりやすく伝えるかを考えることがよかった。
- ・話を要約したり、声に出して読んだりして内容を深く理解することができた。
- ・意味を理解して、それを自分の言葉で話せたことがよかった。
- ・本文の内容について、絵を描きながら内容をさらに深く考えたり、なぜこんな行動をした のかなどを想像したりすることができた。
- ・みんなの前で発表したことで、少し度胸がついた。案外楽しかった。

<反省改善すべき点・改善すべき点>

- ・自分が担当している文だけでなく、他の文章も暗唱するべきだった。
- ・声の大きさ、速度が適切でなかった。グループでの練習がもっと必要だった。
- ・ほとんど教科書の本文をそのまま写してしまった。表現力が足りないと感じた。
- ・聞いている人がもっと分かるように、話し方がもっと上手になりたい。

サマリーシートの変遷

<資料4>Part1

Lesson2

日本語の質問に日本語で答え、 それを英訳し、サマリーを作る。

Sleeping with Lions

< 資料 6 > Part 2 ~ 4 英語と日本語で質問し、英語 で答え、サマリーを作る。

Lesson2 part3 Sleeping with Lions ですはいつどこでがつび、会ったと記 惟していますか。 In what year of their stay did Mark remembers it was duaring this stand year Mark first meet Bones?

2. マーガギーンパと偶然会ったときギーン overthe forestoric of their ston ズはどのように立っていたか? How was Bones standing when Mark happened to see him? 3. 彼は何を食べようとしていました He was strying to eat the old bord sp. the plead assistant. What was Bones trying to eat? 4. ですは何に気付いたか? What did Mark find? 5. ま゚ーンス゚が歩くたび何がおこった Bons fell booking the grown time he walked? 6. 何が明らかでしたか? It was clear that he was dying What was clear? 7. どんな感情に直面していたのか? hat kind of feelings was Mark Mark was focus with a different which has life or a stand of the feelings was Mark which has been supported by the second of the feelings was Mark was focus for the second of the feelings was Mark was focus for the second of the feelings was Mark was focus for the feelings was focus for the feeli faced with? 8. 被はどんなことを後に後悔すると What did Mark think that he Mork disrible be migue fater reques we be might later regret?

9. 最終的に何を決断しましたか Finally, he decided to save Borns if he con What did he decide?

<資料 7 > Part 5 英語で質問し、英語で答え サマリーを作る。

manacy about	Sleeping with Lions
 In what year of their stay did the rainy season not come? 	It was during printer year.
Where did many animals wander and why?	They waveled toward our edge of the Gone Reserve to look for worder.
3. Why did Mark and Delia worry when the animals wandered toward the edge of the reserve?	Because Here cans a designer of them seeing filled by Junters occasion the susperve.
4. Were they surprised that Bones came to their base camps that day?	les, they dish were
5. What number of the ear tag did lier have?	He had for tog."001".
6. In two months, was there any rain?	NO, there washing.
7. What did Mark and Delia decide?	They decided to sourch for Bonus.
8. What was the name of the friend who called on the radio?	His name Was Doug.
9. Where was Doug calling from?	He was colling from a fount outside the reserve.
10. What happened to Bones in the end?	He was shot by some hunders.
11. What's your favorite animal? Why?	My favorite ammal is a big deg- especially a German skepterd - Because they are cool and clever.
12. What stories have you read or movies have you seen about animals?	I have seen "Ite ope" Anes. Business of this Story, I had interested in Ma
13. Have you ever taken care of an injured or sick animal or pet?	No. I hoven't. But I want to try it when have a chance:
14. What do you think of Mark and Delia?	They are one of the greatest people I be I They had a good job.

A マークはどんな状態? 彼は(程答ハキ!!)いて、まだ(ずき:しこい?:the was in his sleeping hopf skill harf-posteop-図 彼らはどこにいるのか。 彼らは(りかい/マリンド・キャイナン 年度) They were on at open 1785 of Recolution 後は(多 で)が(近でに(主音)が関こえた。 He based on animal approachist. 3. 何が起こったのか。 その雌ライオンは彼らのそばを通り過ぎて、((0^{px-f-})先の g. その雌ライオンは 展子)に歩いている、1頭の大きい様ライオンの とてかけに挟わわった)。 Conference from method part Rep to a back the Part army, and for decomment to a big put from. 「あのライオンの(#行1月2)。あれはボーッズ (にろてよい う)」 "Look at the scar on that liver's leg" "Isn't that Books?" ("15.1 MAX BONS?" (Belle unispeed) 207-175. WBM8-77 E(7-7-7) 7-4 16-17)ライオンた That is the from they would "flower," はいます「in they wanted foods. 被は彼らの関りに信息がヘライナンがはマリシ)のをみた The Sour lions/stopping around thom/s situation in all. 7. マークが目にしたのは 「「春間のかりず力のこともへき、かしかさん)でも、驚く

(4) Lesson 2 を指導して感じた課題

このレッスンでは、生徒が英語で理解した内容を基に、英語で Story Retelling することを目標 としていたため、おおむね目標は達成できた。発表という活動を目標にしていたため、和訳穴埋 めシートを内容理解の助けにしたつもりだったが、和訳穴埋めシート<資料1>に日本語訳があ るため、訳があればよいという考えが強い生徒は、活動に積極的に取り組めていない場面も見られた。しかし、和訳穴埋めシートを使うことで、時間を有効に使うことができ、定着させるための活動にも時間をかけることができた。

サマリーシートは前頁のように、段階を追って難易度を上げていった。初めは、日本語サマリーを作成する際に、和訳穴埋めシートを見ている者が多かったので、教科書のみを見てシートを完成させるように指示をした。そうすることで、何度も英文を読み返させることができた。生徒が活動に意欲的に取り組んでいたので、日本語でのサマリーをなくし英問英答をしながら英語サマリーを完成させる形に変更した。 $Part 2 \sim 4$ は日本語の質問もヒントとして載せていたが、Part 5 では、英問のみを載せておき、それに英語で答える形式のサマリーシートにした。

発表の理想的な形としては、あらかじめ書いて準備せずに、即興で本文の内容を簡単な英語で話すことであると考える。そのためにはインプット、インテイク、アウトプットを繰り返す必要がある。授業中にそのことを意識して指導してきたため、ほとんどの生徒が自分の分担の部分は自信をもって発表できていた。しかし、「ただ英文を言う」という形になってしまっている生徒も多く、自分の言葉として発話する、相手が分かりやすいように発話する、というような視点での指導が不足していた。表現活動をする際の「相手意識」をもたせるような指導が必要であると感じた。

このような課題を解決できるように、Lesson 3 では、「筆者の意図や心情の動き」や社会的状況などを含めて本文が伝えようとしていることを意識させながら、英語で理解させ、英語で自己表現をさせる small output を多くさせたいと考えた。

事例 2 Lesson 3 FREE THE CHILDREN

単元の評価規準

コミュニケーション	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての
への関心・意欲・態度	7 1 E HE 20 90 1 11 E 7 9)	知識・理解
・ペアワークにおいて、	ペアワークで、本文の	・児童労働についての文	・分詞の用法を理解して
相手の伝えたいこと	内容に関しての英問	章の内容を読み取るこ	いる。
を理解しようとして	英答ができる。	とができる。	・児童労働に関して自分
いる。	読んだことに基づき、	・Oral Introduction を聞	の意見をもつことがで
・JTE の質問に工夫を	児童労働についての	き取ることができる。	きる。
凝らして答えようと	自分の意見を書くこ		
している。	とができる。		

(1)Lesson 3の Oral Introduction の内容

- ア Lesson 3 に入る際に Oral Introduction を実施し、生徒と教師、生徒同士のインタラクションを増やす。
 - (ア) チョコレートとサッカーボールを見せながら、生徒が好きなチョコレートの原料であるカカオの生産が世界一である国と、生徒の好きなサッカーのボールの生産が世界一である国をペアで推測させる。
 - (イ) 答えはコートジボワールとパキスタンであることを伝え、どちらの国でも、誰がそれらを

生産しているかをペアで考えさせる。

- (ウ) 生徒にとって身近なチョコレートやサッカーボールは、子どもたちがその生産に関わって いることを伝える。
- (エ) 子どもたちが学校に通えない現状や児童労働の実態について、スライドを用いて、英問英答を交えながら説明をする。その後、教師の話の内容について、どのような感想をもったかをペアで伝え合わせる。

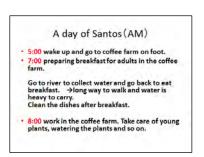
Oral Introduction で用いた説明に用いたスライド(抜粋)











Listening to my talk,
what do you feel
and think?

(2) Part 1 ~ 5 の指導

- ア 新出単語の意味をペアで確認させた後、口頭で意味を確認する。用法が難しいものは、分かりやすい例文をいくつか提示し、意味を理解するだけでなく、実際にその語を用いて英文が作れるように指導をする。
- イ 本文を日本語で確認する場合は、生徒が誤解したり、つまずいたりしそうな文のみにする。 重要語句や表現、新出文法項目等については、語句シート<資料9>を使って説明する。
- ウ 本文の定着のためにフレーズチェックシート<資料 10>を用いた活動をする。左側には日本 語を、右側には英語をフレーズごとに記入できるようなワークシートを作成する。日本語は印 刷しておき、英語は生徒に記入させる。エの活動につなげるため、読みの練習もさせる。
 - (ア) 教科書やノート等を見ないで、一人で英文を書かせる。
 - (4) 教科書を見ながら、自分で英文を確認させた後、ペアで確認させる。
 - (ウ) 教師が日本語を読み、それに対応する英文を Chorus Reading させることで、英文の確認をさせる。
 - (エ) フレーズチェックシートを用いて、ペアで読みの練習をする。徐々にワークシートを見る 回数を減らすように指導する。
- エ Summary and comprehension sheet < 資料 11 > を用いた活動をする。本文の理解を深め、 定着を図るために、上段は穴埋め形式で本文のサマリーを完成させる活動、下段は生徒同士で 英問英答させる活動にする。裏面にも同じものを印刷しておく。
 - (ア) 個人で Summary パートを完成させる。Chorus Reading をさせ、答えを確認する。

- (イ) ペアで、A役、B役を決めさせる。A役は何も書き込みのない裏面を見ながら要約を口頭 でB役に伝えさせる。B役には書き込みのある表面を見ながら相手の要約が合っているかを 確認させる。
- (ウ) Comprehension パートの英問英答をペアで行わせる。A役が質問し、B役に答えさせる。 途中役割を交換させる。
- (エ) 教師が英問を読み、全員に一斉に答えさせることで、答えの確認をする。
- (オ) 英問の正答を、ワークシートに記入させる。

<資料 9 >語句シート <資料 10>フレーズチェックシート

<資料 11>Summary and comprehension sheet

	son 3 Part 1
1	
1.1	one morning: 3/12 (f)
	as usual: (17862)(2
1.2	I didn't make it past the front page. ⇒ 4 set \$\frac{16}{2} - \therefore 1 \text{str\center}(1/2 + \text{\$\tau}) \\ \tau \$\text{\$\tex{\$\text{\$\text{\$\text{\$\text{\$\exitit{\$\text{\$\text{\$\text{\$\tex{
1.4	catch one's eye: 8 % A39 1/3.
1.5	It was a shock.
	the same ~ us: 10 = 7/c/8) ("~
	Twelve, about the same age as I was. \Rightarrow /2 $\beta^{q}\ell^{z}$, $ \mbox{$\langle +^{q} \gamma \rangle $$
1.1	be forced to ~: 33 44491 ^ \$ 455 43.
	free (16) har from . It in the trans-
	against (fil) -/: p+tr + ⇔for (fil) · (= 16 file=
1.1	the was shot dead. ⇒ (8.04)\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\
	S+V(shoot)+O+C: O を撃って C の状態にする
	**shoot (shel) _ lake _ lake
	5 Some people believe(ho)was murdered by aomeone who had warned Accorded 2812 1817: 1880 1 1922-517 \$\$ \$ 17 1801: \$22 17 1-285(2) 123.
Tal	m_{p}/\min to stop his activities. $\Rightarrow m_{i}=(p \cdot p_{i}) \cdot (p \cdot p_{i}) \cdot (p \cdot p_{i})$
7.	※warn+人+to do~: 人は ~ 12 に) *** 5 イル
P3	3
Ĩ	
J	I found a few newspaper articles reporting the problem.
1.2	I found a few newspaper articles reporting the problem. One A, another B. : > i A. & 5 - > i B
1.2	One A, another B. :—>tlA, & 5 —>tlB One was about children younger than me working hard in coal mines.
1.2	One A, another B. :>tA. & 5>tB One was about children younger than me working hard in coal mines.
1.2	One A, another B. :—>tlA, & 5 —>tlB One was about children younger than me working hard in coal mines.
1.2	One A, another B. :—>tA. & 5—>tB One was about children younger than me working hard in coal mines. —children (niv) were younger than me and working hard in coal mines.
1.2	One A.*, another B. \mapsto 25LA, $\langle s \rangle \mapsto$ 21D \otimes 20s. was about children younger than me <u>working hard in coal mines</u> . \Rightarrow 4cl, $s_i(s_i)$ \in 20s. \Rightarrow 4cl \otimes 4cl \otimes 4cl \otimes 5cl \otimes 5cl \otimes 4cl \otimes 4cl \otimes 5cl \otimes
1.2	One A···, another B·······DEA, \$5 ····DEB One was about children younger than we working hard in coal mines. **Activitie** — children (n/e) were younger than me and working hard in coal mines. Another mentioned children injured or killed by exclosions at fireworks factories. Why was nothing being done to stop such terrible things? **Activity** **Tyte*** **Tyte**** **Tyte****** **Tyte****** **Tyte**********************************
1.2	One A.*, another B. \mapsto 25LA, $\langle s \rangle \mapsto$ 21D \otimes 20s. was about children younger than me <u>working hard in coal mines</u> . \Rightarrow 4cl, $s_i(s_i)$ \in 20s. \Rightarrow 4cl \otimes 4cl \otimes 4cl \otimes 5cl \otimes 5cl \otimes 4cl \otimes 4cl \otimes 5cl \otimes
1.2 1.3 1.7 1.8	One A-, another B. — OEA A, (5) — OEB Done was about children younger than as $packing hard in coal mines$. — $degree = -delidren (pi/o)$ were younger than me and working hard in coal mines. Another mentioned children injured or killed by coulosions at frawarks factories. Why was nothing being done to stop such terrible things? — $degree = -delidren$ de

		0	2	3	
1	いつのもように(2)				O as usual
2	大きな見出しが私の注意を引いた(6)	V	0		On his feedling lought my eyes
3	私とほぼ同じ年だった(7)			Succession	a mount the sound right per I was .
4	私はその話をほとんど信じられなかった(4)		C,		I could bounty believe. the story.
5	無理やり動かされた(4)				was forced to work
6	児童労働に反対する世界根模のキャンペーン(6)				a worldwisk aurpaign against child inper-
7	児童労働の問題を調べるために(7)	V			10 study the problem of Child labor
8	その問題を伝えているいくつかの新聞記事(7)		Q		B of few newsproper orcicles reporting the problem.
9	花火工場での爆発で負傷したり死んだりした 子ども道(8)			-	Children injusted or killed by explosions at fineworks f
10	なぜ何も行われていないのか(5)		9		why was bothing being stone?
11	中流階級の地域(2)	Ī	Ī	T	middle-class wighterfeed.
12	世界の向こう側に(7)	t	T		100 the other side of the world.
13	自分自身の世界(3)	V	t	-	my own world
	私は落ち込んだ気分で帰宅した(5)	t	1	1	1 fairs here feeling down.

質	き込み用
SU	MMARY Parti •
1.	Play "rock-paper-scissors" with your partner, Decide A and B.
2.	"A" person: read the summary aloud within 1 minute. (Do not write the answer.
3.	"B" person: listen to what your partner said.
4.	If time is over, "B" person try it within 1 minute.
C	One morning in April 1995, one big (ped live) in the newspaper caught my eye
	title was "Child Laborer, Boy, 12, Murdered." I was too (Specked) to believe the
ato	ry. The 12-year-old boy was (foyled) to work at a carpet factory. After he wa
fre	e, he started a worldwide (compar que) against child labor. Some people believe the
he	was murdered by someone who had (worred) him to (stop) his activities.
¥	Why was (μογωγ) being done to stop such terrible things?
Core	the section of the section where the section is the section of the
Line	MPREHENSION Please switch the role after Q3.
	This time, "A" person: ask the questions below.
	"B" person: answer them in English, Answer in full sentences.
3.	When you finish, write down the answers by yourself.
1./	When did Craig read the story about the child laborer who was murdered?
7	He year it in April 1915.
2.	After Iqbal Masih was free, what did he start?
"(He started a used with companion.
3.	What day of the week was lubal shot dead?
	He was shot dood on Sunday
4.	After school, where did the author go and what did he do?
1	the west to the public library to surely the ploblem of child lay
5.	What kind of area did the author live? He lived in the middle - closs veigh bording. He lived middle - closs veigh berhood.
6.	How offen do you read a newspaper?
	I sked is everyday.

オ 本文についてさらに深く考えさせるため、筆者の思いが含まれる箇所、または心情を理解さ せたい箇所などに関して質問する。ワークシートを配布し、書いて答えるようにする。この活 動が「Lesson 3 のまとめの活動」につながるように工夫する。

各 Part での質問

- Part 1 Why did Craig's own world seem a little darker?
- Part 2 Craig's group made a presentation to other students. What do you think they told through the presentation?
- Part 3 According to the textbook, Craig's group learned that knowledge was their key. What does this mean?
- Part 4 Mother Teresa said to Craig, "The poor will teach you many things." What does this word mean? What does "many things" mean?
- According to the textbook, "the change starts within each of us." You have read Lesson 3. Does the change start within you?

基本的な授業パターン

1時間目 内容理解 (30 分) 定着活動 (10 分) ・語句シートを使用しての説明 ・フレーズチェックシート ・適宜英語英答 ・フレーズごとの確認

2時間目 定着活動(40分) ・フレーズチェックシートの音読(ペア) まとめ ・Summary and comprehension sheet ・考えを深めるための英問英問

(3) Lesson 3 のまとめの活動

Lesson 3 で学んだことのまとめの活動として、児童労働について考え、自分の意見を発表させる活動を実施した。レッスンの導入で用いたスライドを再度利用した。Oral Introduction は現状を伝えるために作成したスライドだったので、メッセージを伝えるようなスライドや本文で触れたことに関するスライドを追加した。まずはペアで、次に4人のグループで発表させた。発表の際、考えを補うために絵を用いてもよいとした。発表の後は、聞いていた生徒には必ず感想を述べさせた。

- ア 英問英答をしながら、スライドを見せる。
- イ スライドの最後で、"After listening to the teacher's talk, what do you think about child labor?"という質問をし、児童労働について自分の考えをまとめさせた。
- ウ まずはペアで、次に4人のグループで発表させる。
- エ 相手の発表に対して感想を述べさせる。

追加したスライドの例

Do you want to escape if you were a child labor? Is it possible?

If they escape, their parents might be in trouble.

Q. What do they need for change?

They need knowledge.

If they know many things, they may come up with a good idea to change the situation.

Q. How do they get knowledge?

Education is the key.

Are you still children?

You may be in between children and adults.

But soon, you will be adults.

You can't be onlookers(傍観者).

Learn about the fact.

You have to take an action to stop child labor.

And you have to be a smart consumer to buy things which isn't made by child laborers.

生徒の意見の例 (原文のまま)

- Perhaps I'm using goods which were made by working children. I can't use them. If people know the fact, we can save the children. I want to help the children. But I don't understand how I can save them. I think people all over the world should think about how to do for them.
- I think we should do something for help and they need help. We come to school every day and we study with many friends. I thought it is usual thing. But I know it is very happy thing. So we should thank our parents and people around me. I am happy, so I want to share my happiness with children who work every day.

(4) Lesson 3 を指導して感じた課題

このレッスンでは、最終的に生徒が、児童労働に対して本文で学んだことをもとに、英語で意見を述べることを目標としていたため、おおむね目標は達成できた。発表に向けて、フレーズリーディング、口頭でのサマリー、英問英答を準備段階として実施した。

生徒は、英語で内容に関する質問をすると単語である場合もあるが、何とか英語で返答ができるようになりつつある。しかし自信がない、恥ずかしいという気持ちがなかなか払拭できず、積極的に発言できない生徒もいる。間違いを恐れずに発言をする雰囲気を作っていく必要がある。

また、筆者の心の動きを問う質問、例えば Part 1 で "Why did Craig's own world seem a little darker?"と質問したところ「(筆者が) 目を閉じたから」「夜になったから」という解答があった。言葉の意味は取れていても実際にどういうことを言っているのかを理解していない生徒がいることが分かった。本文だけでなく社会的状況などを含めて本文や筆者が伝えようとしていることは何なのかを考えさせる必要があると感じた。

最後に、児童労働の過酷さを再確認させ、そのことに対して生徒に考えさせるための活動を行った。生徒が英文を書く際のヒントになるよう、スライドを見せながら、習った単語や易しい表現を使って説明を加えたり、多くの質問をしたりした。自発的に意見を書こうとする姿が見られ、中には自分の伝えたいことが英語で言えないもどかしさや、自分の英語力の足りなさを痛感している生徒もいた。周囲の生徒に「〇〇って英語で何て言えばいいの?」など尋ね、協力しながら取り組む生徒も多くいた。また、自分が悩みながら意見を書いたため、相手の意見を聞きながら「自分だったら」という視点で考えていたようである。

意見発表というゴールを常に意識して段階的な指導を行ってきたため、何とか全員が意見を発表することはできた。生徒に読んだことについて考えさせ、それを英語で伝えさせるということに重点を置いていたので、発表内容に関しては、指導が不足していた。例えば、自分の思うことは伝えることができても、なぜそう思うのか理由まで述べられない生徒もいた。また、英語としての正確性も不十分なものが多かった。生徒の「思いを伝えたい」という意欲は育むことができたが、「どのようにして」という技術的な部分まで指導できなかったことが課題である。準備段階での指導を見直す必要があると感じている。

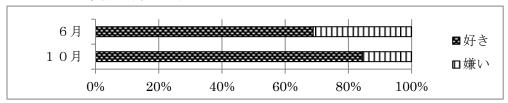
4 検証とまとめ

(1)事後アンケートによる検証

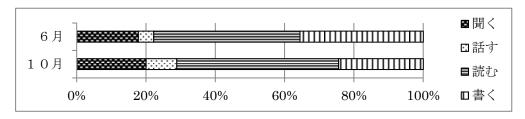
これまでの活動を通して生徒の意識がどのように変化したかを確認するために、同じ 45 名を対象に、事前アンケートと同じ内容のアンケートを実施した。

ア アンケート結果

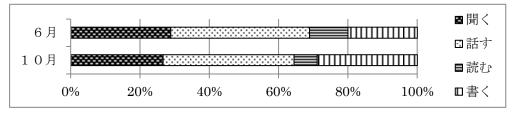
1 あなたは英語が好きですか?



2 「聞く」「話す」「読む」「書く」の中で、最も得意なことは何ですか?

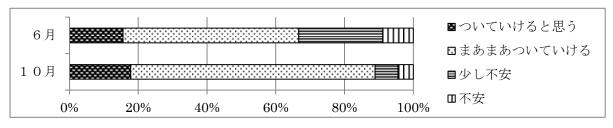


3 「聞く」「話す」「読む」「書く」の中で、最も苦手なことは何ですか?

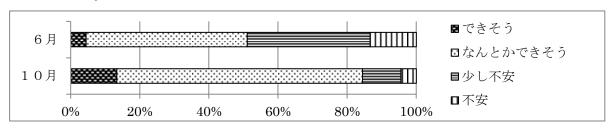


4 生徒が英語に触れる機会を充実させるとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とする ために授業を英語で行うことについて、あなたはどう思いますか?

①先生がたくさん英語で質問したり、説明したり、指示をしたりすることについて。



②自分が英語で質問に答えたり、ペアワークをしたり、発表をしたり、意見を書いたりすること について。



イ アンケート分析(6月と10月の比較)

アンケートを比較すると「あなたは英語が好きですか」の質問では好きな生徒がやや増加し、嫌いな生徒が減少した。「読む」ことや「書く」ことを得意とする生徒、「聞く」ことや「話す」ことを苦手とする生徒は依然として多いままであり、大きな変化にはつながらなかった。

教師が英語を「話す」ことへの不安や生徒達が英語を話すことへの不安が減少しているのは、常に英語でのインプットを意識して授業をしてきた成果ではないかと考える。4①で、「ついていける」「まあまあついていける」と回答した理由としては、「質問を何度か繰り返し言ってもらえるから」「先生の言葉の中で熟語を覚えたりできるから」「分かりやすい単語や知っている単語が多いから」などが主なものであった。「少し不安」「不安」と回答した理由としては、「少し話すスピードが速い」「何を言っているか分からない時がある」などが多かった。

また、4②について、「ついていける」「まあまあついていける」と回答した理由としては、「自分で言いたいことを英語で伝えられる力を付けることも大切だと思うから」「英語での受け答えができるようになるから」「英語で取り組むことで新しい発見がありそうだから」などが主な意見だった。「少し不安」「不安」と回答した理由としては、「自分で英文を作成するのが苦手だから」「言いたいことを英語でまとめられないから」などの意見があった。これらの意見からも、英語での活動に取り組む意欲や姿勢は高められたのではないかと考える。

(2) まとめ

様々な活動を工夫して段階的に取り入れることで、生徒ができるだけ多くの英語に接し、訳読 に頼らず英語を英語のまま理解したり、生徒同士が意見交換をしたりしながら、最後に発表がで きるようになるよう指導を心掛けた。また、視覚教材を用いて既習の表現で繰り返し説明したり、 質問したりすることによって内容理解を深められるよう留意した。

発表に関しては、二つのレッスンとも、最終的な目標を生徒にあらかじめ示すことで、生徒は 目標を意識して授業中の活動に取り組んでいた。発表は苦手と感じていた生徒でも、発表後の達 成感から次回への意欲を話す者もいた。また、他者のよい点を知る機会にもなったようで、ペア ワークやグループワークにより積極的に取り組むようになった。

「訳すことが理解すること」と思っている生徒もいるが、授業中に、生徒の興味・関心を引いたり、意欲を高めたりするような英語での活動を行っていくことで、和訳がゴールではなく、英語を運用できるようになることが大切であることを生徒に意識させることができたのではないかと考える。ある生徒が「前は相手が英語で言ったことを頭の中で日本語に直して、自分が言いたいことを日本語で考えて、それを英語に直して、それから話していたけど、今は相手の英語を聞いたら、日本語でなく英語で考えるようになったよ。だから、前より早く言えるようになった。」と嬉しそうに話していた。活動の際の生徒の生き生きとした表情や一生懸命に工夫して取り組む姿勢を見て、教師として教えなければならないことは何なのかを改めて考えた。授業中に何か活動を実施することが求められているのではなく、重要なのは、どのようにその活動を実施するのか、なぜその活動を実施するのかであり、そのことを教師が深く考えることで、活動の効果は高まるのだと感じている。

おわりに

平成 25 年 4 月より、新学習指導要領が学年進行で実施される。外国語科(英語)では、科目が大きく再編される。「英語 I 」は、よりコミュニケーション能力を身に付けさせることに重点を置き、「コミュニケーション英語 I 」となり、必修科目となる。また、円滑に意味のあるコミュニケーションが図れるよう、指導する語彙数も 2200 語から 3000 語に増加する。文法事項とコミュニケーションを切り離したものと捉えず、文法事項は言語活動と関連付けて指導することで、実際のコミュニケーションの中で用いることができるようにさせることも明示されている。このように、生徒のコミュニケーション能力を伸長させるために、様々なことが盛り込まれているにもかかわらず、「授業は英語で行うことを基本とする」という文言ばかりが注目を集めてしまっていることも事実である。「授業を英語で行う」目的は何なのかを、英語を教える教員が改めて考える必要がある。

「授業を英語で行う」には、具体的にどのような活動を行っていけばよいのかについて、生徒の実態に応じた研究を行った。研究事例 1、研究事例 2、研究事例 3 の全てにおいて、事前アンケートで、生徒が「聞く」ことに苦手意識を感じていることが分かり、コミュニケーションを図る際に必要不可欠な「聞く」力を養うことを中心に、4 技能を総合的に養うための言語活動を研究した。

研究事例1と研究事例2は、授業の「導入」、「内容理解」、「表現活動・定着活動」において、どのような指導法があるのかという研究である。教科書本文の形式や、内容等に応じて、様々な実践を行っている。ワークシートや留意点などとともに、様々な指導法が提示されている。生徒の実態や教科書のレベルに合わせて、これらの指導法を自校化して実践していただきたい。また、研究事例3は、個々の場面ではなく、一つのレッスンを英語で進めていくためには、どのように指導したらよいのかを二つのレッスンで実践したものである。最終的には英語での発表という表現活動を目標にして、「内容理解」において段階的な指導を心掛けている。基本的な授業のパターンは変えずに、ワークシートや発問のレベルを徐々に上げている。段階的な指導が必要であるとよく言われるが、その指導方法が具体的に示されているので、参考にしていただきたい。

三つの研究事例全てにおいて、「授業を英語で行う」ことが基本となっている。本調査研究の実践報告を読んでいただければ、「授業を英語で行う」ことに対する具体的なイメージがもてるのではないかと考えている。「よい授業」とは、生徒が活躍する授業であり、生徒が中心である授業である。教師が一方的に英語で情報を与えても、それは「よい授業」ではない。「授業を英語で行う」目的は、生徒が英語でコミュニケーションを図れるようにするためである。「授業を実際のコミュニケーションの場面とする」と新学習指導要領に書かれているが、それは、生徒が、英語で読んだり聞いたりしたことを理解し、その内容に対して自分の意見をもち、それを英語で書いたり話したりして伝える、というコミュニケーションを図る場面が多くある授業を目指していくという意味である。英語教師として、目の前の生徒に身に付けさせたい英語力は何か、身に付けさせるべき英語力は何かをよく考え、教師にとっても生徒にとっても「よい授業」を行っていくことが、ますます求められていると考えている。

◇平成24年度高等学校における教科指導の充実 研究協力委員・研究委員(外国語科 英語)

研究協力委員

 栃木県立宇都宮女子高等学校
 教 諭
 福田麻友子

 栃木県立鳥山高等学校
 教 諭
 石川 七都

 栃木県立大田原高等学校
 教 諭
 上野 敦士

研究委員

栃木県総合教育センター研修部 指導主事 大岡 寿子

高等学校における教科指導の充実 外 国 語 科 (英語) 「授業を英語で行う」ということ

発 行 平成25年3月 栃木県総合教育センター 研究調査部

〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町1070 TEL 028-665-7204 FAX 028-665-7303 URL http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/